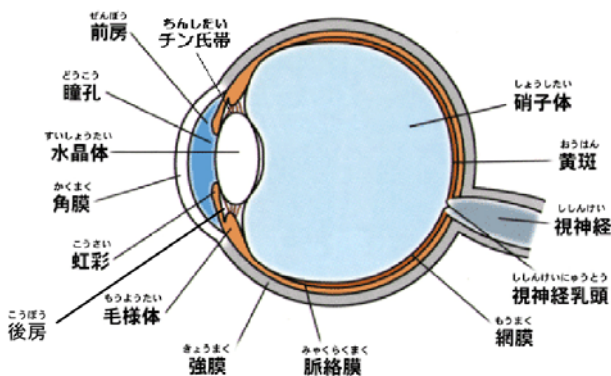


2013年3月22日

ブドウ膜炎という病気が、現代医学ではどのように説明されているかを知るために、まず目の構造について説明しましょう。その説明のあと、ブドウ膜炎がどのような病気かについて現代の眼科の専門医がどのように考えているかを、眼科の医学書を参照しながら述べ、その間違いを指摘しましょう。



ブドウ膜は脈絡膜と毛様体と虹彩の3つの部分を指します。ブドウ膜炎が波及すると、強膜炎や網膜炎となっていくのです。ついでに黄斑の部分に注目してください。この黄斑が加齢によって変性し、ものが見にくくなる老化現象を加齢性黄斑変性症といいます。今をときめく iPS 治療の対象になっていますが、果たして成功するのでしょうか？

眼球を上から真ん中を切り取ったときの横から見た断面図を載せました。一目瞭然でしょう。それぞれの目の部位の名称の中で、瞳孔や水晶体や角膜や虹彩などは既に知っておられることでしょう。ところがこの構造図にはブドウ膜という名称は見られません。ブドウ膜といわれるのは、眼球はひと粒のブドウに似ていますし、そのひと粒のブドウを取り囲んでいる膜に似ているのでつけられたわけです。専門用語としては眼球血管膜とか、眼球中膜といわれるものであり、眼球の壁の真ん中の層を指します。その層の最外側を眼球繊維膜といたり強膜といたりします。その層の内側は網膜に連なります。

ブドウ膜と呼ばれるこの眼球血管膜は血管と神経に富んでおり、多量のメラニン色素を含んでおり、黒褐色をしています。なぜメラニン色素が多いかという光を集めるためであり、と同時に光のエネルギーはメラニン色素で吸収され、核の中にある目の細胞の遺伝子が破壊されないためです。このブドウ膜、つまり眼球血管膜は、上の図を見ながら理解してもらいたいのですが、目の後ろのほうから脈絡膜、毛様体、虹彩の3つの部分から成り立っています。従ってブドウ膜炎と名づけられるのは、この3つのうちどれかに炎症があれば名づけられるのです。

ブドウ膜は神経に富んでいるので、この神経にヘルペスウイルスが住みやすいのですが、どの専門の眼科書にも書いていません。かつ血管神経が豊富ですから、ますます眼球血管膜といわれるブドウ膜は、ヘルペスウイルスが住みやすいのです。ところがこのブドウ膜炎は 1906 年にスイス人のフォークト、1914年に日本人の小柳が報告し、その後日本の眼科医である原田が詳しく報告したので、フォークト-小柳-原田病という病名がつけられたのでありますが、その本質については 100 年以上も見つけだされていないので、私がこのホームページで答えを出しましょう。愚かにもブドウ膜炎は、メラニン色素を産生する網膜の色素細胞に対する自己免疫疾患とか、自己アレルギー疾患といわれていますが、これが間違いであることも証明しましょう。

その前に眼球のそれぞれの部位の働きも簡単にふれておきましょう。私は眼科専門医ではないのですが、実は病気の全ての専門医といってもいいのです。なぜならば現代の医学は臓器別に病気があるように思われていますが、実は病気の原因、つまり人体にとっての異物は化学物質、ヘルペスウイルス、風邪のウイルスの3種類と、さらにあえてもう1種類付け加えると細菌感染症を起こすブドウ球菌やレンサ球菌だけですから、眼科の病気についても原因療法で自分の免疫で全ての眼科の病気も治すことができることを知っているからです。これを証明していくために、眼科の教科書に載せられている眼科のそれぞれの組織の説明を少し加えながら、ブドウ膜炎の原因についてもふれていきましょう。

角膜(cornea)

表面より上皮、ボーマン膜、固有質(実質)、デスメ膜、内皮の5層で構成されています。

眼の屈折力全体のおよそ2/3は角膜によるものです。

結膜(conjunctiva 又は conjunctive)

眼瞼結膜、結膜円蓋、球結膜の3部に区分されます。

強膜(sclera)

眼球の外側にある白い不透明なかたい膜で、俗に白目といわれる部分です。

虹彩(iris)

虹彩は角膜を通して外から(日本人の多くの場合)茶色に見える部分で、その中央には丸い瞳孔があります。虹彩には、瞳を小さくする筋肉と瞳を大きくする筋肉の2つの筋肉があり、瞳の大きさを変化させ眼球内に入ってくる光の量を加減します。

毛様体(ciliary body)

毛様体には毛様体筋という筋肉があり、毛様体筋の働きによって水晶体と結びつく2本のチン氏帯を通じて水晶体の厚みを変化させ、網膜にはっきりした像を結ぶようにしてピント合わせをします。この働きを調節とよんでいます。

毛様体は角膜と水晶体の栄養に必要な房水を眼球内に分泌する事も大きな役割となっています。

水晶体(crystalline lens)

眼のレンズといわれ眼球内に入ってきた光線を屈折する働きと、毛様体によって厚さを変えられて網膜像を調節する働きを持っています。よく白内障という言葉を目にすると思いますがこの部分が濁った状態になります。

網膜(retina)

錐状体と桿状体とよばれる二種類の視細胞があり、光、色、形を感じます。錐状体は色を見分ける仕事をします。桿状体は光の調節をしますが、色は認識できません。

前房(anterior chamber 又は camera oculi anterior)

角膜と虹彩の前面の間をいいます。この前房という隙間に眼房水が満たされています。この眼房水は眼内組織である水晶体や硝子体や角膜などの栄養液となります。この眼房水は毛様突起で主に生産され、眼の前部を循環し、血管が存在しない水晶体や角膜に栄養を与え、さらに代謝、老廃物を除去する仕事をしています。

後房(posterior chamber 又は camera oculi posterior)

虹彩後面と水晶体の間および水晶体と硝子体の間をいいます。この後房には後房水があり、水晶体や虹彩や角膜内皮にブドウ糖や酸素を与え、代謝産物である乳酸や二酸化炭素などを取って前房水として運び出します。房水の循環経路のどこかに通過障害があると貯留してしまい、眼内圧の亢進を起し、緑内障になります。

瞳孔(pupil 又は pupille)

虹彩の中央にある円形の穴で虹彩の働きにより自律的に大きさが変化して光の透過量の調節等の役割をしています。

視神経(optic nerve)

中枢神経の白質に属し、約 60~80 万の神経繊維からなっています。

脈絡膜(choroid 又は chorioidea)

強膜の内側にある部分で、色素が多いために黒く、虹彩とともに瞳以外から余分な光が眼球の中に入ってこないようにしています。

黄斑(macula lutea)

眼底の中心部を黄斑といいます。上に書いたように加齢性黄斑変性症は黄斑部に限局した網膜の変性ではありますが、老化により他の網膜全体にも変性が多かれ少なかれ見られます。黄斑部の網膜色素上皮細胞の加齢性変化や脈絡膜血管の加齢性変化が原因といわれますが、異常になった網膜上皮細胞を iPS で新たに作った網膜上皮細胞に入れ替える臨床実験がこれからされようとしています。おそらく失敗すると考えられます。なぜならば入れ替えても、遅かれ早かれ残念ながら iPS 細胞は必ず癌化するからです。つまり正常に見える網膜上皮細胞は長く維持できなくなるからです。

中心窩(fovea centralis)

黄斑の中心を中心窩といいます。通常は中心窩でみた時の視力が一番いいです。

視神経乳頭(optic disc 又は papilla nervi optici)

ここから視神経として、脳の方へ神経線維が送られます。

ゼン氏帯(zonula ciliaris)

毛様体小帯やゼン小帯などもよばれ水晶体をつついている細い線維です。水晶体の厚みを変え、光の屈折の度合いを変えるのです。

ぶどう膜(uveal tract)

上に書いたように、虹彩、毛様体、脈絡膜の 3 部の総称であり、どれかひとつでも炎症が起こるとブドウ膜炎と名づけます。このブドウ膜炎の原因のひとつが、それぞれの膜の筋肉を支配する神経に入り込んでいるヘルペスと免疫の戦いのときに見られるヘルペス性神経炎です。もちろん、虹彩、毛様体、脈絡膜にも結合組織があり、この結合組織に溜まった化学物質との戦いによる膠原病も、ときに一部原因となっているのです。しかしながら、このような微小な臓器の結合組織に溜まる化学物質は極めて微量であるので、やはり初期の症状はヘルペス神経炎から生じ、その治療のためにステロイドを大量に投与されることによって膠原病となってしまい、と同時にヘルペスも増えていき、最終的にはリバウンドを繰り返し、治らない病気にされているのがブドウ膜炎であります。その証拠を下の手記で証明していきましょう。

硝子体(vitreous body)

眼球内の大部分を占める無色透明なゲル状のもので、眼球の形を保ち、外から眼球に加わった力に抵抗する働きをします。

これからブドウ膜炎について、一般的な眼科の教科書を引用しながら、私のコメントを赤字で付け加えて生きましょう。

[どんな病気か]

全身のメラニン細胞(メラニン色素を有する細胞)に対する免疫反応(めんえきはんのう)が高まったためにおこるぶどう膜炎(まくえん)の一種で、日本人などの有色人種におこります。

(スイス人のフォクトが最初にブドウ膜炎を報告したように、メラニン細胞を持っている外国人にも見られます。ここで、日本人の瞳が黒くて、白人の瞳が青白いのはなぜかを説明しましょう。実はメラニンには 2 種類あるのです。黒い瞳の人が持っているメラニンはユウメラニンといい、日本語では黒色色素とか褐色色素と訳されます。一方、白人が持っているメラニンはフェオメラニンといい、あえて

日本語に訳せば、灰色色素とか黒っぽい色素と訳されます。教科書の説明が間違いであるのは、ブドウ膜炎を起こした人の皮膚の内皮細胞にあるメラニンが全く炎症を起こしていないのに、メラニン細胞に対する自己免疫疾患だと言い切っている点です。もちろんこの世に自分自身の成分を自分の免疫で殺そうとする自己免疫疾患などは何一つないという真実を理解したい人は[ここを読んでください](#)。

アトピー性皮膚炎でステロイドを使いすぎると、ステロイドにより遺伝子を変えられた表皮のメラニン細胞が崩壊し、崩壊したときにメラニン色素を大量に表皮にばら撒き、その色素が皮膚の結合組織に沈着し、ステロイド性黒皮症になっている人を私はゴマンと見てきました。つまり、ブドウ膜炎でステロイドを使われてきた人たちが、人為的に作り上げられたのが、本格的なブドウ膜炎といえます。もっと精細にフォークト・小柳・原田病という病気が起こるのかを述べましょう。

この手記の患者さんも、最初はアトピーや他のアレルギーがあり、知らず知らずのうちに長期にステロイドを投与されてきたのです。と同時に、強いストレスに耐えるためにステロイドを自分の副腎皮質から出し続けていたのです。このように自分のステロイドで免疫を抑えている間に、ヘルペスがブドウ膜の神経にも増え続けていたのです。顔にもアトピーのためにステロイドを使い続けていたので、ますますこのヘルペスに対する間違った治療を知らぬ間に自分自身でやっていたのです。これがまさに私のいう、膠原病は自分で作る病気であり、ヘルペスも自分で増やし続ける病気であるという意味なのです。ステロイドを大量に入れることによって、網膜に大量にあるメラニン色素細胞もステロイドを取り込み、徐々に徐々にメラニン色素細胞の核を変性させ、崩壊しつつあったのです。つまりステロイド性網膜メラニン細胞変性症を作り続けていたのです。何も自己の免疫が自分の上皮細胞を攻撃していたどころか、免疫の働きを抑え続けたためにブドウ膜炎を起こす準備をしていただけなのです。

かつては虹彩（こうさい）（毛様体（もうようたい））炎（えん）の症状が著しい「フォークト・小柳病」と、脈絡膜炎（みやくらくまくえん）から網膜剥離（もうまくはくり）を生じる「原田病」として別々の病気と考えられていましたが、どちらも経過中に眼底や全身の色素が薄くなっていくことから、同じ病気と考えられるようになり、フォークト・小柳・原田病あるいは原田病と呼ばれるようになりました。

（この段落の『どちらも経過中に眼底や全身の色素が薄くなっていくことから、同じ病気と考えられるようになり』という文章は、まるで病気の経過を手をこまねいて何もしないで最後まで傍観しているだけのような書き方であり、完全に自然経過を見ているだけのような態度をとり続けている点に注意を向けてください。免疫を抑える様々な薬を使って本来の病気の真の姿を変えているにもかかわらず、このような書き方は、あらゆる難病といわれる病気についての医学書の記述に共通であることを充分に知ってください。

ここで私が言いたいことが何だかお分かりですか？つまり彼らは、病気の起こす真実の原因を解明しようとしないうえに、その病気の自然経過を変えるために、つまり症状を一時的に取るためにステロイドを大量に使っているにもかかわらず、まるで病気の真実の経過であるような書き方をしていることです。つまり現代の医学者は病気の原因を知らないどころか、病気の経過の真実も知らないうえに、病気の治し方も全く知らない“でくの坊”であるにもかかわらず、難病の権威であると言われることに喜びを感じ、大学の有名教授であることに悦に入っている集団であります。つまり臨床の医学書というの

は、全て医者が人為的に病気を作り上げた嘘八百の医学書と言っても過言ではありません。なぜこんなキツイ言い方をするかというと、この文明の世に原因の分からない病気は何一つない上に、病気を治すのは患者自身であることを骨の髄まで知っているからです。もちろん医学部の教授先生方は、本当は多くの坊などではなくもちろん大秀才であるのですが、医学書にステロイドを使わない儲からない真実の経過を載せてしまうと、組織である医学会からたちまち村八分にされてしまうので、真実を教科書に記すことができないのです。残念です。

なぜこんな愚かなことが、現代医学が性懲りもなく続けられるのでしょうか？答えは極めて簡単です。製薬メーカーは免疫を抑える薬しか作れないからです。ここで製薬メーカーのわずかな名誉のために付け加えておきましょう。実は免疫を助ける薬を3種類だけ作っています。それがワクチンであり、抗生物質であり、抗ヘルペス剤だけなのです。これらは感染症にかかわる薬だけであります。

いわゆる現代のブドウ膜炎を含めて難病といわれる100種類以上の病気は全て膠原病であるので、結局は膠原病の原因が分からず、死ぬまで免疫を抑え続けるだけの薬を使うだけですから、病気の本当の自然経過、つまり免疫と異物との戦い真実の自然経過を全く知らない教科書を書き続けているだけなのです。あえて彼らが教科書に書いている病気の経過は医原病を作っている経過であり、いわゆる造病医学のための教科書であり、さらに絶対に病気を治せない医療をして金を儲ける医学教科書であり、命を守る免疫を殺す医療のやり方を教科書に書いているだけなのです。つまり現代の医者は医薬原病を作っているにもかかわらず、様々な検査をやり続け、大量の化学物質である薬を大量に患者に放り込み、ますます病気を治らなくするやり方を医学生に教えているだけなのです。残念です。

もっと具体的に医薬原病の本質をお教えしましょう。医薬原病というのは一体何だと思えますか？2つ意味があるのです。ひとつは言わずと知れたことですが、病気は異物が入ったときにそれを免疫が正しく処理して、その異物を処理してしまうことです。敵の異物によって処理の仕方が異なるのですが、この異物の処理の仕方には3~4つしかないのです。ひとつは殺すことです。2つめは排除することです。3つめは共存することです。4つめは一時休戦することです。この処理の仕方はヘルペスウイルスだけに当てはまるのです。このような答えを出してくれる免疫の働きを抑えることによって、免疫は病気を治すことができなくなってしまうのです。つまり造病医学となるのです。

2つめの意味は、製薬メーカーは免疫の遺伝子を一時的に変えて戦いをやめさせることで症状は消えてしまうのですが、無理やり免疫の遺伝子を変えられてしまうと、必ず後で免疫の遺伝子の修復が起こってしまいます。このときに再び免疫と異物の戦いが始まり、はじめよりもっと扱いにくい強い症状が生じるのです。この病気の症状はまさに抑えられた分だけ激しくなり、はじめよりもはるかに強いリバウンドという症状が出るのです。まさにリバウンドが医原病なのです。このリバウンドを起こさせないために患者は一生薬を飲み続けなければいけないので、最後はあらゆる免疫の力が弱まってしまい、わずかな風邪のために死んでしまうことがあるのです。つまり人殺し医療となってしまうのです。

最近ベンジャミン・フルフォードという日本語がメチャ上手いカナダ人が『人殺し医療』という本を書きました。そのサブタイトルは「マフィアが支配する現代メディカルシステム」と銘打たれています。彼は医者ではないのですが、資本主義が金儲けのために存在しているという観点から、医薬業界を完膚

なきまでに正しく批判しています。彼は現代文明を様々な観点から批判する書物を以前から何冊か書いていますが、優れたジャーナリストとして今回は医療の誤りを鋭く告発しています。一読に値する書物です。私の知らない情報が満ち満ちていました。要するに、民主主義が資本主義に支配されている限りは金が全てであり、金儲けのためにあらゆるチャンスをずる賢い人間たちがハイエナのごとく無知な大衆を食い物にしていることがよく描かれています。

彼の言うように、一番儲かる仕事は、患者の命をもてあそび、薬と称して死を売り歩く医療が最高の儲け口であることも証明しております。医学を知らないベンジャミン・フルフォードが鋭くえぐっている真実は、やはり金儲けのために医薬業が行われ病気を作っているという結論は、私が免疫学を徹底的に勉強し、かつその免疫で病気を治すという真実がゆがめられているのも、金儲けであるという意味であるという点においては全く同意見にならざるをえません。悲しいことですが、人間は永遠に利己的な遺伝子を最大限に満足させるために生まれ死んでいく業を持っているのです。この人間の業は残念ながら人類が減びない限りは永遠に続くでしょう。愚かな大衆は生まれたときに 38 億年かけて進化した免疫の遺伝子で病気を治せるのにもかかわらず、ずる賢い医者や製薬メーカーにだまされ続ける宿命を背負っているようです。

皆さん、病気を治すことができるのは自分自身の免疫の遺伝子だけであり、決して医者でもなく薬でもないことを知ってください。何回も何回も書き続けますが、免疫を助ける薬だけが価値があるものです。それは漢方薬とワクチンと抗生物質と抗ヘルペス剤だけです。自分の免疫で治せない病気は、絶対に治らないのです。その理屈と証拠を、手を変え品を変え、お伝えしているのがこのホームページなのです。日本のブドウ膜炎の皆さん、世界のブドウ膜炎の皆さん、ブドウ膜炎の本当の原因はヘルペスなのです。このヘルペスを神経節に封じ込めることができるのは、あなた方の免疫だけなのです！ヘルペスだけが神経に隠れるという狡猾きわまる進化をしたために、人類は滅亡するまでヘルペスウイルスと戦い続けざるをえないのです。しかし皆さん、ヘルペスは人の命を奪う力はないのです。安心して下さい。自分の心で免疫を抑えない限り、かつ医者が出す薬で免疫を抑えない限りは、必ず正常な生活に戻ることができるのです。この患者さんのブドウ膜炎も私が治したのではないのです。治したのはこの患者さんの免疫なのです。自分の免疫で治せない病気は絶対に治りません。私は名医でも何でもありません。患者さんの免疫を信じているからこそ、患者さんの免疫を邪魔しないからこそ、最後は患者さん自身の免疫が全ての病気を治してくれるのです。）

[症状]

発熱、頭痛、全身倦怠感（ぜんしんけんたいかん）などのかぜ症状で始まり、

（風邪にかかると、風邪のウイルスをやっつけるために免疫が上昇します。そのときに同時に全ての人が神経に持っているヘルペスウイルスをも見つけだします。なぜ風邪のウイルスを殺すときにヘルペスウイルスを殺す力が増えるのか知りたい人は[ここを読んでください](#)。要するに、風邪のウイルスを殺すためには風邪のウイルスに対する特異的なIgG抗体を作る必要があります、一方、ヘルペスウイルスを殺すためにはヘルペスウイルスだけに特異的なIgG抗体を作る必要があるのですが、実は風邪のウイルスに対する特異的なIgG抗体を作る際に、全てのウイルスを殺すことができる非特異的な働きが増加するのです。それが先天免疫であり、免疫の働きを高める様々なサイトカインであるのです。一言では語りつ

くせないので、ヘルペスについて詳しく書いた項を読んでください。) 急に両目がかすんだり、ものがゆがんで見えたり、見えなくなったりします。(これがブドウ膜炎の症状ですが、これらの症状は全てブドウ膜の調節がうまくいかないからです。虹彩、毛様体、脈絡膜の働きは、この3つの組織に分布している神経によって制御されています。ところがこれらの3つの神経に潜んでいるヘルペスウイルスと免疫との戦いが始まると、このような働きの調節がうまくいかなくなります。つまり、ヘルペス性神経炎が生じているのです。) そのころには、めまい、耳鳴(みみな)り、難聴(なんちょう)もともないます。(これも第8脳神経である内耳神経の前庭神経で炎症が起こればめまいが起こり、蝸牛神経で起これば耳鳴りや難聴が生じるのです。[メニュールについてはここを読んでください。](#)) 髄液検査(ずいえきけんさ)では髄膜炎(「髄膜炎とは」、「細菌性(化膿性)髄膜炎」、「流行性脳脊髄膜炎」、「結核性髄膜炎」、「真菌性髄膜炎」、「ウイルス性髄膜炎」)がみられます。(ブドウ膜炎で髄液検査をする必要は全くないのですが、物好きな医者が色々やっています。「ヘルペスウイルス性髄膜炎」というのが一番正しいように聞こえますが、もっと正しい言い方は「ヘルペス性末梢神経炎」というべきです。というのは、髄膜という言葉は脳との関わりがかなり強いと思われており、患者の皆さんはびっくり仰天されます。実は髄膜というのは中枢神経、つまり脳と脊髄を包む結合組織性の被膜の総称であり、軟膜、クモ膜、硬膜の3種類で、ヘルペスウイルス自身が脳内に入っていくのは三叉神経の眼枝である血管神経だけであります。本来、脳の実質は痛みを感じず受容体は全くないのです。従って頭痛は髄膜に栄養を送っている末梢神経である三叉神経の血管神経で炎症が起こったときに痛みを感じるのです。

私はあらゆる症状を持ったヘルペス性神経炎の患者をたくさん見っていますが、いまだかつてヘルペス性髄膜炎を経験したことがありません。細菌性髄膜炎や流行性脳性髄膜炎や結核性髄膜炎や真菌性髄膜炎は過去の遺物であります。これらの髄膜炎が起こるためには、よほど免疫を抑えない限り見ることはないのです。従って、ブドウ膜炎でこのような病気になって「頭が冒される」とか「盲目になる」とかと脅かされてしまうと、ブドウ膜炎と診断された患者は怖くなりステロイドを飲まされてしまうのです。ステロイドを投与されるとヘルペスの症状がなくなるので治った気になるのですが、ステロイドをやめることができなくなり、やめると再び免疫が回復し、様々な神経炎が生じ、永遠に治らない病気となってしまいます。まさに現代の医学はベンジャミン・フルフォードが言うように、『人殺し医療』となってしまうのです。ヘルペスは絶対に人を殺すことはできないウイルスなのです。だからこそ人類が消滅するまで全ての人間の神経に隠れ、様々な神経でヘルペス性神経炎を起こし続けることができるのです。)

その後、頭髪、まゆげ、まつげが抜けたり、白髪化したり、また、皮膚に白斑(はくはん)が見られるようになります(早期治療により、脱毛、白髪、白斑などが見られることは少なくなっています)。

(ステロイド性白斑というべきものです。マイケルジャクソンはステロイドを使ってメラニン色素細胞を殺し続けたので、自分の皮膚を黒から白に変えることができました。しかしステロイドを使いすぎたために、巨大な富を使わずに50歳という若さで死んでしまいました。)

両眼に著しい虹彩(毛様体)炎、脈絡膜炎による網膜剥離、視神経乳頭(ししんけいにゅうとう)の浮腫(ふしゅ)のみられることが、原田病のぶどう膜炎の特徴です。

(これらの症状は全て患者がステロイドホルモンを出し続けたか、医者にステロイドを入れられて免疫を抑えすぎて、ヘルペスを増やしすぎた後、リバウンドを繰り返してヘルペスウイルスとの戦いがひどくなっていくときに見られる症状です。これらの症状もまるで医者は全く何もできませんから、ブドウ膜炎の経過を見させてください、という経過を書いたわけではありません。そんなことのために患者が病院に行きますか？必ず炎症を止める薬を出し続けるものです。原田先生が1922年に原田病に関する治験(両眼の網膜はく離を伴う急性脈絡膜炎の一例というテーマ)で初めて報告したときはまだ人工合成ステロイドホルモンはできていませんでした。しかしながら炎症はあったので、アスピリンのような痛み止めとかを出すことができました。アスピリンはアセチルサリチル酸といわれるものであり、19世紀後半にドイツの製薬メーカーのバイエルが作りました。このアスピリンは代表的なサリチル酸系薬剤ですが、昔から耳鳴りや難聴などが副作用として挙げられていました。まさにアスピリンによって免疫が抑制されている間に、ヘルペスウイルスが内耳神経で増殖してしまっていたので、一時的にアスピリンの効果がなくなると免疫の戦いが内耳神経で起こることがあったので、アスピリンの副作用のひとつとして数えられたのです。アスピリンを使っている間に、知らぬ間にブドウ膜である脈絡膜や毛様体や虹彩に分布する神経に潜んでいたヘルペスウイルスも増殖していたのです。このようなアスピリンを鎮痛や解熱や抗炎症のために使われることによって、どんどん増えていったヘルペスが、薬をやめることでリバウンドを起こして再び免疫が回復し、ブドウ膜炎となっていたのです。病気は免疫が回復したときに起こるものだとすることを頭に叩き込んでください！この意味で病気は良いことであることもついでに知ってください！

ここで言いたいことがあります。医者は人間の病気を見る際に症状が出ている臓器だけしか見ないので、体全体を守る免疫系にどのような悪事を成しているかを全く考えないために、ますます隠された病気の原因を見つけられずに、自分たちが免疫を抑えている間にどんな悪いことをしているかを知らぬ存ぜぬで通そうとするのです。まさに知らぬ間に医原病が増えているにもかかわらず、そのような新たな病気を難病、難病と言い続けるのであります。

それではなぜアスピリンが膠原病を作るのでしょうか？なぜアスピリンがヘルペスウイルスとの戦いを増やすのでしょうか？その説明は次回にまわします。乞うご期待！

2013/04/11

まず、さらに詳しくアスピリンとは何かについて述べましょう。既に述べたように、アセチルサリチル酸であり、いわゆる非ステロイド系の抗炎症剤の代表であります。皆さん、高校の化学の時間にサリチル酸に無水酢酸を加えてアセチルサリチル酸を化学実験で作ったことを覚えていらっしゃるでしょうか？まさにそれがアスピリンなのです。サリチル酸だけでも抗炎症作用があるのです。19世紀には鎮痛剤として苦味が強い柳エキスに代わってこのサリチル酸が鎮痛剤に使われたことがあったのですが、副作用として強い胃痛を引き起こしました。このような胃障害を克服するために、19世紀後半にアセチルサリチル酸が合成されました。このアスピリンは先天免疫の仕事を行うプロスタグランジン(PG)の生合成阻害による鎮痛作用や抗炎症作用や解熱作用があります。さらに近頃は、アスピリンは微量で抗血小板薬として血栓の予防に使われています。微量のアスピリンが脳血栓を起こしたり、高血圧に伴う動脈硬化を抑えたりするために使われるのも、血小板の働きがプロスタグランジン(PG)

の代謝に関わっているからです。

最近の新聞に、「京大の成宮周名誉教授がプロスタグランジン（PG）がヘルパーTリンパ球に働いて、免疫反応を高めることを明らかにした」と報道されていました。この記事がどうして重要であるかを説明する前に、アスピリンがどのようにして免疫の働きを抑制するかを説明しましょう。もちろんプロスタグランジン（PG）は何種類もあり、その働きの全てを語ることは複雑で、かつ難しいので語り尽くすことは不可能であります。いずれにしろ、アスピリンが全ての種類の痛みを軽減することができるのは、ほとんど全ての組織の細胞で作られるプロスタグランジン（PG）を合成する酵素の働きを阻害することが可能であるからです。それではアスピリンはどのようにして痛みや熱を引き起こす免疫の働きを阻害するのでしょうか？以前にも書いたことがあるのですが、細胞膜にあるアラキドン酸という脂肪を原料とし、シクロオキシゲナーゼ（COX）という酵素の働きを阻害することによって、プロスタグランジン（PG）を作らせないのです。これまではこの先天免疫のひとつであるプロスタグランジン（PG）が、後天免疫のヘルパーT細胞とどのように関わっているかが明らかにされなかったのですが、成宮先生が最近明らかにされたのです。

私が常に「頭痛薬や鎮痛薬などが必ず免疫を抑えるので、リウマチをはじめとする膠原病の痛みや解熱のために使ってはならない」と言うのは、まさにアスピリンをはじめとするあらゆる種類の薬は、免疫の遺伝子、つまり免疫の酵素の遺伝子を変えることによって一時的に症状を取るだけで、結局免疫の遺伝子が修復されたときに再びリバウンドが起こって痛みがひどくなるので、使う意味がないからです。さらに自然な免疫の遺伝子の働きを抑えると、ウイルスや細菌を殺すことができないのみならず、化学物質と共存できなくなってしまうからです。

ウイルスや細菌と戦っているときに、プロスタグランジン（PG）の働きを抑え、その結果ヘルパーT細胞の働きも抑えていることになるので、その間、ウイルスや細菌は増え続けていくのです。言わばアスピリンを使うということは、敵に塩を送り、人体をウイルスや細菌だらけにさせるだけで、ますます病気がひどくなるだけなのです。その結果、免疫の働きが弱い人は、単純な風邪がいつの間にか増えた敵のために、肺炎になったりして死んでしまうことになるのです。一方、化学物質を処理するために生じるアレルギーや膠原病に際してアスピリンなどを用いると、一時的に症状を止めている間は化学物質は増えることはないのですが、共存するための働きも同時になくなってしまうのです。いずれにしろ、長い間分からなかった、先天免疫であるプロスタグランジン（PG）の働きが、後天免疫であるヘルパーT細胞の働きを生み出すということを明らかにされた成宮周京大名誉教授に乾杯です。

ついでに書いておきたいことがあります。既に述べたことがあるのですが、アスピリンをはじめとするサリチル酸系薬剤の副作用としては、胃腸障害、アレルギー、耳鳴り、難聴などがあげられていますが、なぜ耳鳴りや難聴が起こるのかを説明しましょう。アスピリンなどを継続して過量に投与し続けると、ヘルパーT細胞やキラーT細胞（CTL）の働きが、プロスタグランジン（PG）が作られなくなるために内耳神経にいるヘルペスウイルスが増殖し、その結果メニエール病になるからです。[メニエール病についてはここを読んでください。](#)

ついでに、アスピリンやそれ以外の非ステロイド解熱鎮痛薬である、インドメタシンやイブプロフェ

インやナプロキセンなどで、アレルギーや喘息が出るのはどうしても説明しておきましょう。実は既に述べたことがあるのですが、先天免疫にはアラキドン酸から作られるプロスタグランジン (PG) だけではなく、プロスタグランジン (PG) は敵を殺すために作られるのですが、実はもうひとつアラキドン酸から作られる、ロイコトリエン (LT) というアレルギーで化学物質を排除しようとするために作られる生理活性物質があります。まさに先天免疫も殺すべき敵と共存すべき敵とを処理するのに免疫の進化の過程で明確に分けた事実を示唆しています。命を持ったどんどん増える敵は殺し、殺せない化学物質は共存するメカニズムを、先天免疫の段階で作りに上げていたのです。いずれもその材料は全ての細胞の膜にあるアラキドン酸なのです。

敵を殺すのではなく、排除するアレルギーで処理しようとするルートには、リポキシゲナーゼという酵素を用いてアラキドン酸を様々な種類のロイコトリエン (LT) に変えることを進化の中で作り出したのです。先天免疫の働きも後天免疫に劣らず、いかに素晴らしいかお分かりになるでしょう。にもかかわらず、現代の医療は全て 38 億年の免疫の進化を 100%無視した治療しかできないのです。なぜならば製薬メーカーは免疫を抑える薬しか作れないからです。残念ですね！免疫の遺伝子は完全なのです！欲ボケした人間の頭脳が 38 億年の免疫を上げる働きに勝てるわけではないのです。人間は傲慢になりすぎました。何のために？金のために。残念です。

さらに付け加えておきます。成宮周先生はプロスタグランジンがヘルパーT細胞の働きを亢進させ、ヘルパーTh1にさせるということを明らかにされたのでありますが、いずれロイコトリエンがヘルパー1T細胞をクラススイッチし、ヘルパー2T細胞を作りやすくさせ、最後は化学物質が共存できるようにレギュラトリート細胞も活性化させることができる研究も他の学者がいずれはおやりになると思います。しかし残念なことにこの優れた成宮先生の研究の目的も「プロスタグランジンがヘルパーT細胞を活性化しないようにする薬を作れば病気は良くなるだろう」と示されているところが、現代の医学研究が病気を作る研究に過ぎないことが分かりでしょう。とどのつまりはますます免疫の遺伝子を抑える無駄な薬を作り、最後は新たな病気を作るだけであることを、成宮先生ご自身が気づいておられないのは、現代の医学者の最も大きな誤りであり、38億年の免疫の遺伝子に対する侮辱そのものであるのです。残念です。

それではなぜアスピリン喘息が起こるのでしょうか？まずひとつは、アスピリンをはじめとする非ステロイド解熱鎮痛薬は、プロスタグランジン (PG) を作るために必要な酵素であるシクロオキシゲナーゼ (COX) が作らせなくさせ、その結果アラキドン酸からプロスタグランジンの (PG) 産生が抑制され、気管支拡張性の作用があるプロスタグランジン E₁ (PGE₁) やプロスタグランジン E₂ (PGE₂) などが減り、その結果気道が収縮し、喘息が起こるのです。ふたつめは、PG を作らせないような解熱鎮痛薬を用いると、アラキドン酸が PG の産生のために使われることができず、LT を作り出すリポキシゲナーゼのために全てのアラキドン酸が使われるのです。気管支に入ってくるアレルギーを気道に入れまいとする働きのある様々な LTC₄、LTCE₄ がより多く産生され、気道収縮が起こるからであります。アスピリン喘息患者では、LTC₄ を合成する酵素の遺伝子を転写する mRNA の発現が亢進していることが分かっています。

実はこの酵素の働きを抑えようとする薬がかの有名な小野製薬が作っているオノンであります。この

小野製薬から2億円をもらって京大で講座を作られたのが、かの有名な本庶佑特任教授です。彼はわずと知れたクラススイッチの遺伝子を見つけたその人ご自身です。産学共同のために免疫の遺伝子の発現がオノンのためにどれほど阻害されているかを皆さん知ってください。私がついていることは本庶佑先生が知らぬはずはないのですが、製薬メーカーからお金をもらおうと真実が語れなくなるという象徴的な出来事です。というよりも、製薬メーカーが学者を完全支配しているという構図のひとつです。アレルギーはクラススイッチをして最後は免疫寛容になり、化学物質、つまりアレルギーと共存できるという真実が隠蔽され続けるのです。最近、かの有名なジャーナリストであるベンジャミン・フルフォードが書いた「人殺し医療」を熟読してください。ベンジャミン・フルフォードの寿命が短くならないことを祈っております。それよりも自分自身の命が短くならないことを祈るべきでしょうか？ワッハッハ！

今日の新聞で、京大グループがiPSで筋ジストロフィの病気を再現したことが載せられていましたが、遺伝子を変えて病気をすることは簡単ですが、それでもなぜiPSが筋ジストロフィの筋肉細胞になったかというメカニズムについては一言もふれられていないのみならず、38億年の進化の結果作られた筋肉の遺伝子がどのようにすれば異常な筋ジス細胞を正常な筋肉細胞に戻すのかについては一行もふれられていません。ただ筋肉に関わる疾患の治療薬の開発に役立つということしか書かれていません。薬で病気を治すことは絶対にできません！ましてや医者が病気を治すことは不可能です。病気は自分の免疫の遺伝子で治すことができるだけなのです。その遺伝子を根拠もなく変え続けて、どうして病気を治すことができるでしょうか？不可能です！遺伝病は遺伝子による病気ですから、治すことは絶対にできないと断言できます。だって自分の遺伝子で病気を治すべきなのに、遺伝子が病気ができればどうして遺伝子病を治すことができるでしょうか？不可能なのです。遺伝子を人間が自由に操れると思うのは、人間の傲慢さの象徴です。

例えば、今でもときめき続けているステロイドで遺伝子の転写因子を一時的に変えても、結局は遺伝子の発現をOFFにただけであり、再び遺伝子の修復が自然に行われれば、元の本阿弥になるのみならず、ステロイドで治った病気などは何一つないのです。もっと多くの転写因子を細胞に入れて、正常な細胞を異常にして生まれたのがiPS細胞なのです。このiPS細胞を作るために1個の線維芽細胞にある400万箇所の転写因子のどれを変えたのか、逆にどれだけ変えなかったのか、一切分かっていないのです。ステロイドでも分かっていないのに、どうして分かるはずがあるのでしょうか？しかも分化のために必要なメチル化についても、どの遺伝子のメチル化をはずしたかについても一切明らかにされておりません。言ってみれば、博打をやっていると言っても過言ではないくらいです。

私なんかの病気は“口悪病”“怒りんぼう病”“気短い病”“気まぐれ病”“醜い病”“嫉妬病”“アホ病”であります。このような病気を生み出す遺伝子を変える薬をiPSを用いてできる限り早く作ってもらって、死ぬまでに治してもらいたいと思っています！ワッハッハ！iPSは必ず最後は癌になることを予言しておきましょう。遺伝子を無理やり変えられるとアポトーシスになるか、癌になる以外の道は閉ざされてしまうのです。分化した細胞を初期化して、細胞の分化成熟の全ての履歴を完璧に残さずして受精卵と全く同じ細胞がiPSであるならば、山中先生にノーベル賞1個は少なすぎます。毎年彼にノーベル賞を与えるべきです。100個でも少なすぎます。

皆さん、60年前にステロイドホルモンが合成されたときに、この人工ステロイドホルモンは“奇跡

の薬”と呼ばれ続けました。60年経ってステロイドが治した病気はどこにありますか？それどころかステロイドによって新たに病気を作られ、人工ステロイドの副作用によってどれだけの命をなくしていったかご存知ですか？38億年かかってできた遺伝子はどんなに大量のステロイドを使おうとも、自分自身を取り戻そうとするのです。取り戻せなかった人たちが死んでいったのです。ブドウ膜炎にしろ、治らないのはステロイドを使うからです。ステロイドが全ての病気の根源です。なぜならば免疫を抑えることによって病気が起こり、病気が治らなくなるからです。

iPSも同じことが言えます。確かにステロイドと同じように、一時的にはそれらしい新たなる細胞ができるように見えても、必ず遺伝子の修復機構が働き出すのです。この遺伝子の修復機構が働かなければ、その細胞はアポトーシスするか癌細胞になるだけです。この修復機構が仮に正常に働き出すと、iPSにした元の細胞に戻るだけです。しかし残念なことにiPS細胞はこの修復機構の遺伝子も変わっているはずで、だからこそiPSは癌細胞になる運命を背負わされているのです。

ステロイドを使えば一時的に免疫の遺伝子の発現がOFFにされ続けますが、それはステロイドで病気が治ったわけではないのです。いずれ必ず免疫の遺伝子の修復が行われ、リバウンドを起こし、最後は患者は絶望の淵に追いやられるのです。ステロイドもiPSも、実は全く同じ機構で働いているのです。それは転写因子のONをOFFに変えたり、OFFをONに一時的に変えただけなのです。さらにステロイドを大量に長期に使えば、修復遺伝子も変えられてしまっている可能性があります。このような過剰なステロイドを使った人たちは、死ぬまで苦しむのをえないのです。

ただiPSがステロイドよりもはるかに異常な細胞であるのは、ステロイドは敵が侵入し、それを排除するためにONになった免疫の遺伝子を一時的に変える目的で使われるのでありますが、使えば使うほど全ての遺伝子に入り込み、OFFをONにしたり、ONをOFFにし続けるのです。したがって様々な副作用といわれる病気が現れるのです。一方、iPSは何の目的もなしにハナから400万個の転写因子をアトランダムにONにしたりOFFにしたりするのみならず、1個の受精卵が正常な1人の人間に成熟するまでに60兆個の細胞の分化に必要なメチル化もアトランダムにはずしてしまうのです。もちろんiPSの大風呂敷は再生医療に使うと銘打っていますが、果たしてそんなことが可能でしょうか？

1個の正常な細胞には成熟分化の過程で1000個以上のメチル化が行われていると言われてますが、iPSはそのメチル化のどの部分がはずれて生まれたのかについても何ひとつ分からないのです。これを脱メチル化といいます。実はこの脱メチル化を知らぬ間に行われた細胞が癌細胞なのです。だからこそ常にiPSは癌化の可能性があると言われ続けているのです。にもかかわらず、iPSが素晴らしいといわれるのは矛盾しませんか？だって現在は癌以上に恐れるべき病気があるのでしょうか？その癌を作る原理も分かっているにもかかわらず、なぜiPSを再生医療の名で用いることを許すのでしょうか？人類のためではありません。病気を救うためではありません。金儲けです。命よりも金儲けを目的にする医療は間違っています。残念です。もちろん癌になっても病気を治したい人はやるべきでしょうが、誰が癌になるための治療に巨額のお金を払うべきでしょうか？国ですか？自分ですか？皆さん、考えてください。

たわれみに、1人の人体の60兆の細胞の中に転写因子がトータルでいくつあるのかを計算しましょ

う。400万×60兆です。日本語で言えば、2垓4千京個です。次にメチル化の総数を計算しましょう。1000×60兆です。6京です。)

[治療]

全身的なステロイドの大量投与（点滴）が行なわれ、その後、内服でステロイド量を徐々に減量します。通常、数か月におよぶステロイド治療が必要です。

（全てヘルペスとの戦いを一時的にやめさせるだけであり、かつほんのわずかの化学物質と免疫のIgGとの戦い、つまり膠原病の症状を一時的に楽にするだけで、先ほど述べたようにステロイドは全ての細胞の遺伝子に入り込んで、転写因子を不必要にONにしたりOFFにしたりして異常な遺伝子の働きを生み出すので、最後はよく見えた眼が盲目となるのです。）

また、虹彩（毛様体）炎に対するステロイドや散瞳薬（さんどうやく）の点眼も行なわれます。ステロイド大量投与が行なわれる以前は、ぶどう膜炎が慢性化するため、

（ブドウ膜炎が慢性化するのは、再びヘルペスとの戦いが始まり、一部分、化学物質との戦いが始まるために慢性化してしまうのです。慢性という病気は全て医者を作ったと言っても過言ではありません。免疫が戦う敵は殺すか、共存するか、神経節に封じ込めるかの3つしかないのです、それですぐに勝負がついてしまうので、慢性化する病気などは現代文明には何一つないのです。ただ、ヘルペスだけは神経に住み着き、自分の免疫で神経節に封じ込めても、再び自分の免疫が落ちたときに神経節からのこのこと出現し、再び免疫が落ち続けている限りはあちこちの末梢神経に繁茂し続けるのです。末梢神経にヘルペスが増え続けるからといって、何も神経が食い荒らされるわけでもなく、神経機能が冒されるわけでもないのです。ただこの増殖したヘルペスと免疫が戦うときに初めて様々な神経症状が出現するので、ところがどの本にもどのようにヘルペスが神経を伝わり、次の神経に伝わっていくかについては一切書かれていないどころか、どのようにして神経細胞に潜んでいるヘルペスと免疫が戦って神経症状が出現するかについても何一つ書かれていません。それではウイルスの増え方や戦い方を勉強している私が少し詳しく書いて見せましょう。

ウイルスは遺伝子しか持っていません。その遺伝子はDNAとタンパクで作られています。この遺伝子を増やすためには材料が要ります。神経細胞の中で一番材料が多いのは神経細胞体です。ご存知のように、神経は細胞体と樹状突起と神経軸索の3つの部分から成り立っています。樹状突起はシナプスで別の神経の軸索から得た情報を受け取ります。そして細胞体にある核に伝え、核の中にある遺伝子をONにして必要なタンパクを作ります。そのタンパクは樹状突起とは反対側にある軸索に伝えられ、それが神経軸索の末端まで伝えられると、そこで次の細胞とシナプスをして様々な神経伝達物質を放出し、必要な情報を次の神経に伝えていくのです。結局、核があるのは神経細胞体だけであり、かつウイルスのDNAを人間の神経細胞の核に入り、人間のDNAをのっとらないとウイルスは増殖することはできません。従って神経細胞体で増殖した新しい多くのヘルペスウイルスは、神経軸索に沿って次の神経に到達し、さらに神経細胞体まで行き、そこでまた増殖を繰り返すということになります。

免疫が落ち続けている限りは神経細胞にいるヘルペスウイルスを見つけだすことが極めて困難なう

えに、ご存知のようにヘルペスウイルスだけは特別に人間の免疫から回避する機構を備えていますから、ただでさえヘルペスウイルスを見つけだし、殺すことが難しいのです。

ここでどのようにヘルペスウイルスが神経細胞で免疫から逃れるかを、あちこちで書きましたがもう一度詳しく書いておきましょう。なぜ私がヘルペスにこだわりすぎるのでしょうか？もちろん全人類が地球上から消え去るまで人類を悩ませる敵は唯一ヘルペスウイルスであるからです。

1、ヘルペスに対する防御免疫タンパクである IgG を作るための人間が持っている遺伝子の発現をスタートさせるメッセンジャーRNA (mRNA) を分解させるタンパク質をヘルペスが持っています。この mRNA が働かないと、ヘルペスに対する特異 IgG 抗体が作られません。この IgG 抗体がないとオプソニン作用や中和抗体作用や NK 細胞による ADCC の働きによってヘルペスが潜んでいる細胞を殺すという作用もなくなってしまいます。つまり神経細胞に潜んでいるヘルペスを殺しにくくなります。

2、ヘルペスウイルスはインターフェロンの働きを抑えます。このインターフェロンにはインターフェロン α (IFN- α)、インターフェロン β (IFN- β)、インターフェロン γ (IFN- γ) が含まれます。ヘルペスが感染している神経細胞から IFN- α や IFN- β が作られます。IFN- α や IFN- β は警告タンパクと呼ばれ、NK 細胞を活性化させてヘルペスウイルスが潜んでいる細胞を NK 細胞が殺すのですが、IFN- α や IFN- β が作れなくなると、NK 細胞がヘルペスウイルス感染細胞を殺せなくなります。特に神経細胞に潜んでいるヘルペスウイルスを殺すのは主に NK 細胞ですから、ますます神経細胞にヘルペスウイルスが住みやすくなるのです。皆さんがご存知のように B 型肝炎ウイルスや C 型肝炎ウイルスを殺すためにインターフェロンが使われています。ヘルペスウイルスはこのようなインターフェロンの働きを抑えるのです。

3、樹状細胞の働きをヘルペスウイルスは阻害することができるのです。樹状細胞は抗原提示細胞と呼ばれ、ヘルペスウイルスを取り込んで、ヘルペスウイルスのタンパクの断片を MHC I や MHC II にのせてヘルパーT 細胞やキラーT 細胞 (CTL) に提示して、これらの細胞を活性化するためには絶対に必要ですが、この仕事をできなくさせてしまうのです。まるでステロイドのような仕事をするのです。ステロイドは樹状細胞の遺伝子を変えてしまうのですが、ヘルペスウイルスも同じような仕事をするのは驚きですね！

4、ヘルペスウイルスは、補体作用を働かなくさせるのです。補体の働きは、まずウイルスにひっついて穴を開けてウイルスを殺します。さらに補体は敵であるヘルペスウイルスと結びついてリンパ節で B リンパ球の補体のレセプターに結びつき、ヘルペスを B リンパ球に乗り移らせ、B リンパ球に敵であるヘルペスウイルスと結びつかせ、ヘルペスを敵として提示することができます。この補体作用がなければ B リンパ球はヘルペスに対する特異的な抗体が作れなくなります。

5、B リンパ球がヘルペスに対する特異的な抗体を作ったとしても、この抗体の一本足に大食細胞や好中球をひっつかなくさせてしまうのです。素人の皆さんのみならず、あまり勉強していない医者たちは、抗体がヘルペスを殺すと考えている人が多いのですが、そうではないのです。皆さんご存知のように B リンパ球は特異的な IgG 抗体を作ります。この IgG 抗体は、Y 字型になっています。上の 2 本の

手でヘルペスと結びつき、かつ離れないようにします。Y の下の一本足に好中球や大食細胞がひっつきます。すると IgG 抗体に捕まえられていたヘルペスは、すぐに好中球や大食細胞によって貪食され殺されてしまうのです。いわば好中球や大食細胞にとっては、いわばヘルペスは美味しいごちそうなのです。従って IgG 抗体はヘルペスという食事を好中球や大食細胞というお客に美味しい食事を食べさせる仲介の役割をしています。これを IgG 抗体のオプソニン作用といいます。従ってヘルペスが抗体の両手で捕まえられても、一本足に好中球や大食細胞がひっつかなくなり、客がいなくなり、抗体のオプソニン作用がなくなってしまい、ヘルペスはいつまでも食べられなくなってしまいます。

6、キラーT細胞の働きをさせなくします。キラーT細胞は別名、細胞傷害性T細胞ともいいます。英語で Cytotoxic T Lymphocyte (CTL) といいます。キラーT細胞 (CTL) がヘルペスウイルスが感染した細胞を殺すときに、どの細胞にヘルペスウイルスが感染したかを知らせる情報が必要です。MHC II と似た MHC I というタンパクは全ての細胞にあります。(MHC II は4つの細胞しか持っていません。樹状細胞、大食細胞、B細胞、胸腺の上皮細胞の4つです。) この全ての細胞が持っている MHC I というタンパクにヘルペスウイルスの断片であるペプチドと結びついて、これを細胞の膜に提示します。この MHC I -ペプチド複合体を認識した活性化された CTL がこの自分の細胞もろともヘルペスウイルスを殺そうとするのです。神経細胞に潜んでいるヘルペスウイルスの断片と結びついた MHC I を認識する CTL の働きがなくなると、この神経細胞もろともヘルペスウイルスを殺してしまうことができなくなってしまいます。

さらに CTL も抗原提示細胞である樹状細胞からの刺激がないと、活性化されないのです。活性化されない限りは、神経細胞に住んでいるヘルペスを殺すことができないのです。つまりキラーT細胞 (CTL) が活性化されるためには抗原提示細胞である樹状細胞が持っている B7 という分子と CTL 自身を持っている CD28 と結びつく必要があるのです。(この B7 を共刺激 Co-stimulation 分子と呼ばれるのは何回か書いたことがあるのですが、覚えていらっしゃるでしょうか?) 従ってこの CTL の働きがなくなるということは、抗原提示細胞である樹状細胞から刺激が得られなくなり、その結果 CTL の働きもなくなり、神経細胞にいるヘルペスを殺すこともできなくなってしまいます。このあたりは非常に難しいのですが、何回も繰り返し読んでください。

7、ヘルペスウイルスは自分が入り込んだ人体の細胞が自殺しないようにするのです。この自殺を細胞のアポトーシスといいます。人体の免疫はヘルペスウイルスを殺すために自分の細胞も殺そうとするのですが、ヘルペスウイルスはそれをさせまいとするのです。このアポトーシスを起こす働きを持っているのも CTL であります。

どのようにしてヘルペス感染細胞が自殺するかを説明しましょう。この自殺の仕方には2種類あります。それではまずなぜ自殺せざるを得ないのでしょうか?それは一旦細胞に入ったヘルペスウイルスを直接殺す武器を人間の免疫は持ち合わせていないからです。この意味ではウイルスが人体の細胞に入り込むことは、ウイルスが増殖するためのみならず、ウイルス自身が人間の免疫から逃れるためにも極めて都合がいいのです。言い換えると、ひとたびウイルスが細胞に入れば、ウイルスにとって人体の中で最も安全な場所に逃げ込んでしまっているといえます。ましてや人間にとって一番大切な神経細胞に隠れる戦術を身につけるようになったヘルペスほど賢いウイルスはないといえます。いや人類にとって最

も手強い敵は北朝鮮ではなくてウイルスといえます。ワッハッハ！とりわけヘルペスウイルスは免疫の戦いで神経細胞で炎症を起こすと人間にとって最も都合の悪いアホになってしまいますから、神経細胞に隠れたというずる賢さはユダヤ人を超えています。なぜならばユダヤ人の神経細胞にもヘルペスウイルスが入り込むからです。ワッハッハ！

さて自殺の方法については既にも書いたことがあるのですが、復習のつもりで書きましょう。先ほど CTL の働きをヘルペスウイルスはなくさせると書きましたが、これは言い換えると CTL による細胞自殺をさせないということです。ひとつめの殺し方は、活性化した CTL が神経細胞にひつくと、パーフォリンという化学物質を出し、神経細胞に穴を開けます。かつ穴を開けた後、さらにグランザイム B という酵素を CTL は感染細胞の中に放り出します。するとその細胞は核が崩壊し、細胞の働きがなくなり、細胞膜に包み込まれて縮小し、炎症を起こさずにその包みが大食細胞に簡単に食われてしまうのです。ふたつめの殺し方は、CTL は Fas リガンドというタンパクを作って、ヘルペスウイルスが潜んでいる神経細胞に表出されている Fas というタンパクと結びつくと、その細胞内の種々のカスパーゼファミリーといわれるタンパク分解酵素が活性化されて、様々な細胞内タンパクを切断することによって、最終的には周囲の細胞に迷惑をかけずに、つまり炎症を起こさずして、最後は大食細胞に処理されてしまうのです。）

白内障（はくないしょう）、緑内障（りよくないしょう）、眼底の萎縮（いしゆく）のために、重篤（じゅうとく）な視力障害を生じる場合が少なくありませんでした。（これらの症状は全てステロイドを投与したために、眼の周辺の組織の細胞の遺伝子を変えてしまって生じたステロイド医原病であります。）現在では、90%以上で良好な視力が得られるようになりましたが、1年以上の長期間にわたってステロイド治療が必要となる場合もあります。発病後、早期にステロイド大量投与を開始することが、この病気の予後の決め手となります。

（いずれにしろ、ブドウ膜炎の自然経過を最後まで見届けた眼科医はこの世に誰もいません。何もブドウ膜炎に限ったことではないのですが、医学辞典に書かれている病気の経過は、あくまでも病気そのものの経過ではなくて、免疫を抑えることによって一時的には症状は取れても、再びリバウンドを繰り返し、さらに免疫の遺伝子の働きを変えるステロイドを入れ続けて作り上げた、いわば人工的遺伝子病の経過といってもいいのです。なぜならば、あらゆる難病といわれる病気に対する治療法は、全て免疫の遺伝子の発現を一時的に変えているだけで、医者自身が医原病を作っている経過を見ているに過ぎないのですが、世界中の医者の誰一人もその罪を認めようとしません。自分たちが手を下したために元の病気とはまるで違った治らない病気にしてしまったことを認めようとしませんものですから、上記のブドウ膜炎の説明も半分以上は嘘といっても過言ではないのです。残念です。）

今日はここまでです。2013/04/25

私が原田病を発症したのは2012年の12月でした。（賢い患者さんでおられますから、以後の描写は、まさに原田病、つまりブドウ膜炎がどのような経過をたどっていくかがありありと表現されています。さらにステロイドを一切使わないブドウ膜炎の自然経過が理解できるでしょう。これこそ本当のブドウ膜炎の真実なのです。さらにブドウ膜炎の治療で、直接にステロイドを使わないでブドウ膜炎が治って

いく様子も世界で初めての症例ですから、まことに得がたいブドウ膜完治の証拠でもあるのです。

もちろんアトピーでステロイドを使ってきた影響も患者さんのブドウ膜炎を引き起こした原因のひとつではありますが、患者さん自身のストレスに耐えるために、患者さん自身が過剰に作り続けたステロイドもヘルペスを増やすと共に、アレルギーを一部膠原病に変えてしまった側面もありますが、ブドウ膜炎の原因はやはりヘルペスウイルスによるものなのです。ただブドウ膜炎そのものの治療には、一滴のステロイドも一錠のステロイドも医者には投与されることを拒絶したために、クラススイッチもしやすく、かつヘルペスウイルスも殺しやすかったので、「失明する」とか「難病である」とか、絶対に治らないといわれている原田病、つまりブドウ膜炎が簡単に治ってしまったのです。原田病は膠原病というよりも、むしろ目の網膜下に張り巡らされている眼の神経に潜んでいるヘルペスとの戦いに見られる、ヘルペス性網膜神経炎というべきものであるということもお分かりになるでしょう。）

ある朝起きると目が少し見えにくく違和感を感じました。（この違和感が実を言えば、眼の神経に潜んでいるヘルペスと免疫が戦っている徴候のひとつなのです。）疲れ目かな、とあまり気にせずやり過ぎて普段どおり過ごしました。外出時、電信柱や看板を見上げると部分的に欠けて見え、更に夕方になると、遠近感がとりにくく症状は悪化していると感じ、慌てて土曜日でも診てくれる急病診療所を受診しました。（部分的に視野が欠けたりするのも、その部分の神経でヘルペスと免疫が戦い、神経炎を起こしていたからです。）もともと視力はかなり悪いのですが、メガネをかけていてもこの時点で私の目は受付用紙に名前を書くことすら困難になっていました。（いくつかの部分でヘルペス性網膜炎が生じ、光の情報が正しく網膜神経に伝わらなかったのです。）

検査を受け、医師が私に告げた診断は「おそらく原田病です。」でした。聞いたこともないその病名に私は不安を感じ、「治りますか？」と尋ねると、医師は原田病は原因不明の自己免疫疾患で一週間入院してステロイドの大量投与、その後半年間ステロイドの服薬で薬を減らしていけば治る。そしてそれ以外の方法は無い、と。

（60年以上前にステロイドを人工合成したヘンチはノーベル賞をもらいましたが、作られた当初はミラクル・ドラッグとまで言われました。ちょうど山中先生が作った iPS が、まるであらゆる病気を治すことができるように喧伝されまくっているのと似ていますね。しかしながら、ステロイドホルモンが治した病気は、この世に何一つないのです。しかしながらステロイドホルモンは医薬業界に巨大に富をもたらし、今ももたらしつつあります。なぜならば一度ステロイドを用いれば一生やめることができないからです。死ぬまで医者のお世話にならざるをえないからです！

皆さん、眼科医の中には、ステロイドホルモンを大量に投与して原田病は治らないという眼科医もいたり、治ったという眼科医もいるのはなぜだかご存知ですか？さらに似たような問いかけをさせていただきます。皆さん、突発性難聴という病気をご存知ですね。突発性難聴の治療に際して、耳鼻科の先生は原因が分からないがステロイドを大量に1週間点滴投与すると、8割方は治るが2割は治らないという言い方をします。なぜ彼らはこんな曖昧な説明しかできないのかお分かりですか？実はそのふたつの問いに対する答えは同じなのです。

原田病の場合も、「目が見えなくなる」とか「見えなくなる」とかという言い方は実はおかしいのです。突発性難聴の場合も、「耳が聞こえなくなる」とか「聞こえるようになる」とかという言い方もおかしいのです。目が見えなくなるのは、網膜の神経が完全に断絶することであり、耳が聞こえなくなるというのは、聴神経が完全に断絶することなのです。こんな状況はそれぞれの神経を直接切断しなければ起こりえないことなのです。それ以外はどちらも神経伝達が可能である限り、100%正確には見えることがなかったり聞こえなかったりすることはあるのですが、視覚や聴覚の機能は保たれて

いるのです。ただ見え方が悪いとか聞こえ方が悪い状態を、言葉のあやで昔は“めくら”とか“つんぼ”だとかと表現したに過ぎないのです。本当の“めくら”とか“つんぼ”は、実は事故で完全に神経を切断しない限りはありえないのです。

それではどうして目が見えにくくなったり耳が聞こえにくくなったりするのでしょうか？その答えは簡単です。炎症がそれぞれの神経において生じ、炎症の部分が傷ついたままで修復されない限りは、目の見にくさや耳の聞こえにくさが続くのです。それでは見にくさや聞こえにくさがすぐに治るのはどういう意味を持つのでしょうか？それは炎症の傷跡が早く癒えて、神経の正常な電気活動が回復するからです。

さあここで、眼科医や耳鼻科医が考えるべきこれらの病気の原因は何だと思われませんか？まさにヘルペスと免疫の戦いが神経において生じたものです。実は突発性難聴は急性ヘルペス性蝸牛炎というべきものであり、目が見えにくくなった当初のブドウ膜炎は、正しくは急性ヘルペス性網膜神経炎というべきなのです。それではこのような病気に対して、なぜ医者はステロイドを用いたがるのでしょうか？これも答えは極めて簡単です。世界中の医者が大好きなまやかしの万能の薬であるステロイドを用いて、命の泉である免疫を懲らしめることによって戦いをやめさせ、免疫の働きをなくしてしまうのです。すると戦いがなくなり、一時的に炎症も起こらなくなり、さらに炎症の傷が深くなければ、神経の電気信号はステロイドのために見かけは正常に戻るのです。すると一時的に見にくさが消え、聞こえにくさもたちどころに消えてしまうのです。ところが傷が深い場合は、炎症が止まっても傷が残るので、神経の伝達信号は脳まで行かなくなり、いつまでも見えにくかったり聞こえない状態が続くのです。

皆さん、ご存知でしょう。メニエール氏病といって、原因が分からない、治らないという耳の病気の一つですが、突発性難聴でステロイドを使われた人が最終的になりやすい病気です。[メニエール氏病についてはここを読んでください](#)。この病気も160年前に見つけたのがメニエールという人だったので名づけられたのですが、今なお原因が分からないと耳鼻科の医者たちはほざき続けていますが、原因はまさにヘルペスウイルスと免疫との戦いが内耳神経で起こっているだけの話なのです。同じように原田-小柳-フォークト病やブドウ膜炎と名づけられている眼科の病気も、実は網膜神経上でのヘルペスと免疫との戦いによる炎症に過ぎないのです。もちろんこの病気も古来からヘルペスウイルスは存在していたのであったのですが、100年前に原田先生が見つけられて名づけられたので原田病なのです。

皆さん私は老いぼれの一介の開業医ですよ、医者になったのも自分の病気を治すために医学部に入り直した出来の悪い男です。こんな男が知っていることを、東大や京大の偏差値ナンバーワンの頭のいい大学の教授が知らないとお思いですか？ましてや100年も150年も前から知られている病気の原因が、今なお分からないなどという病気がありえると思いますか？全ての病気の原因が遺伝子レベルで解明され始めているのに、ブドウ膜炎も突発性難聴もメニエール氏病も全てヘルペスと免疫の戦いであるということを知らないはずであるとお思いですか？皆さん、まさか私を天才的な臨床医とお考えではないでしょうか？ひょっとしたらそうかもしれませんね！ワッハッハ！

実は私は天才なのです。どのような天才であるかを教えてあげましょう。天才的バカ正直者なのです。ついでに京大や東大の眼科や耳鼻科の教授先生方に悪意をもって言ってあげましょう。彼らは大大天才的ペテン師まがいであると。彼らは私の知っている全ての真実を知っているがゆえに、ヘルペスとの戦いに際しては、ステロイドを大量に投与して、免疫を抑えれば患者をだませるということを知っている上に、ヘルペスがいくら神経に増殖しても、戦わない限りは神経が壊死したりアポトー

シスしたりすることもなく、神経の機能は保てるということを誰よりもよく知っているのです。ヘルペスが原因であるということを患者に知らせてしまうと、医薬業界が完全崩壊することも知っているので、医薬業界が金を儲け続けるためには真実を語ることはできないのです。だからこそ私は彼らのことを大天才的詐欺師まがいといやいや言わざるを得なくなってしまったのです。

彼らは、さらにヘルペスは生命に関わりのないウイルスであることを充分“承知の助”なのです。ただ免疫が正常に戻れば、免疫とヘルペスの戦いが神経で行われることも知っています。人間が生きている限り免疫も生きているわけですから、必ずステロイドを投与しても必ず再びいずれは同じ神経症状が出ることも重々知っています。だけれども無知な大衆に専門家である医者たちが分からないという限りは、医療に完全に無知な大衆をだまし続けることができるのです。しかもステロイドを使えば使うほどあらゆる神経にヘルペスが増殖するので、ますます病気の原因を体内に増やし続けます。ところが必ず人体は一時的にはステロイドで免疫を抑制されても、必ず免疫の働きを復活させます。そのときにさらに戦うべきヘルペスウイルスが多くなっているため症状、つまりヘルペスと神経で戦う様々な神経症状が出てくるのです。するとますます医者はますます仕事が増え、金が儲かる手はずを整えるためにステロイドを大量投与し続けるのです。

皆さん、知っていますか？全身の筋肉の神経で戦う病気が線維筋痛症であることを。一度ヘルペスが筋肉の奥深い筋膜に分布している神経に潜んでしまうと、このようなヘルペスウイルスを殺すことが極めて困難になります。現代社会において最も治りにくい病気は何でしょうか？線維筋痛症です。このような世界で最も治りにくい全身性筋膜炎を作ったのも医者と薬剤師と製薬メーカーなのです。線維筋痛症の痛みを止めるために、大量の鎮痛薬やステロイドを用います。これらの薬は全て免疫を抑える薬であります。このような免疫を殺してしまいそんな毒薬を売り続けるのは医者であり薬剤師であるがゆえに、線維筋痛症は恐ろしい医薬原病なのです。この医薬原病である天才的ペテン師まがいの学者たちは原因が分からないと昔も今もほざき続けています。残念です。悲しいです！

皆さん、ますます私が医学者たちを天才的ペテン師まがいだと名づける根拠がお分かりでしょう。悲しいことですね～悲しいですね～！皆さん私のホームページを読んで賢くなりましょう。自分の病気は自分の免疫で治すということを知ってください。ヘルペスについてはここを読んでください。皆さん、頭痛も肩こりもこむら返りも歯肉炎も全てヘルペスと免疫の戦いであるということがお分かりになるでしょう。）

結婚して3年目、そろそろ子を授かりたいと考えていた矢先の発病でした。

これまで大きな病気などしたことなく、風邪もあまりひかない丈夫な体を取り柄だと思って生きてきただけに自分がとんでもない病気になってしまったのではないかと衝撃を受けました。

月曜日に大きい病院で詳しい検査をしてくださいと紹介状を渡されて帰りました。

まだ断定されたわけではなかったのですが、心のどこかで原田病ではないかも知れないという淡い期待を持ち、主人に付き添ってもらい月曜日に大学病院を受診しました。

検査のたらい回しにあった私の目はどんどん見えなくなり、一人で歩くことも困難でした。

ステロイドは嫌、でも視力が戻らなかつたらどうしよう…。

そんな不安をよそに、医師が冷たく告げたのはやはり「原田病です。明日入院して点滴治療を始めましょう。」でした。

ステロイドの大量投与以外に治療方法はなく、もし早急にステロイド治療しなければ視力は戻らないし失明の可能性もあると言われました。(ステロイドの大量投与以外に治療法はないと言っていますが、これほどおぞましい間違った治療はないのです。治療という言葉は治すために使われるべきでありま

す。ところがブドウ膜炎の治療で用いるステロイドは病気、つまりヘルペス性網膜神経炎を永遠に治さないどころか、永遠に原因となっているヘルペスを増やし続け、最後の最後はステロイド性医原病性盲目にまで至らせてしまうのです。このようなやり方をどうして治療と称することができるのでしょうか？現代文明に残された本当の病気の原因は3つしかないのです。化学物質とヘルペスウイルスとインフルエンザを含む風邪のウイルスしかないのです。原因不明の病気などは何一つないのです。

なぜ原因不明の病気がないのかを論証してあげましょう。皆さん、地球上のあらゆる現象は全て原因があるのはご存知でしょう。原因のない現象などは全くないのです。病気も人体内の現象のひとつに過ぎないのです。病気とは何でしょう？病気とは異物と免疫の戦いによって生ずる正しい現象なのです。従って、異物が人体に入らない限りは絶対に病気は起こらないのです。つまり、人間が生きるために必要な5大栄養素と酸素と水だけが人体に摂取される限りは病気は絶対に起こりえないのです。いわば上に挙げた7大栄養素以外の異物が入って初めてこのような不必要な物質を排除しようとして免疫の遺伝子が発動し病気が生じるのです。従って病気が発生すれば、その原因を探し求めるのが医者の仕事の出発点です。

今まで出会った事がないような症状、つまり病気が生じれば新たなる原因を捜し求め、ほとんど全ての原因が100%と言ってもよいぐらいに突き止められるのです。例えばBSEと呼ばれる狂牛病の原因を知っていますね。プリオンであります。これを見つけたアメリカのプルシナーがノーベル賞をもらいました。SARSも原因は新種のSARSコロナウイルスということが簡単に分かりました。こんなに珍しい最近発祥した病気の原因でさえ簡単に見つけられるのです。近頃では、ユッケを食べて死んだ人の病気の原因も、腸出血性大腸菌O-157であると分かり、厚労省の強い指導によりユッケが日本では食べられなくなりました。残念ですが、にもかかわらず、160年前から知られている病気の原因が分からないはずがないでしょう。しかも突発性難聴にしろブドウ膜炎にしろ、何も珍しい病気ではないのです。にもかかわらず、大医学者たちはこのような病気の原因は分からないと言い張り続けています。残念です。

中世の時代に猛威を振るい、1342年から始まり、その当時のヨーロッパの人口5000万人のうち2000万人が死んだといわれるペストも、その時代は単純に“熱を出して苦しんで、最後は死んでしまうという病気”という名前と呼ばれていただけでした。決してその当事にペストという名前がついていたわけではありません。医学の進んだ現代では、この中世の訳の分からない病気の原因もペスト菌という細菌によるものだということが完全に解明しました。つまり過去の病気の原因さえもが全て解明されている現代医学が、どうして現代の難病といわれる病気の原因が分からないのでしょうか！？いや、分かっているのですが、口に出せないだけなのです。真実よりも権力の方がはるかに大切であるからです。

皆さん、あらゆるマスコミを利用して医薬業界は治る病気を治らないと言いまくっていますが、彼らはその病気の原因については一言も触れていないのです。つまり病気は原因がなければ生じないにもかかわらず、しかも現代文明において死ぬような病気の原因が存在にしないにもかかわらず、病気は怖い怖いと言いまくっているのです。さらに加えて、厚労省は「原因不明な病気の原因が現代文明に存在しているから、毎日毎日その不明な病気の原因に常に気をつけましょう！」などということも言う必要ないのです。なぜならばそんな不明な病気の原因は、まさにないからです。厚労省が口にするのは、せいぜい「風邪のウイルスのひとつであるインフルエンザのウイルスであるH7N9には注意しましょう」というぐらいなものです。それ以外は厚労省は病気の原因について気をつけなさい、と国民に警告を発したことがありますか？（癌は病気ではないのです。なぜならば癌の原因は人体の外

から入ってきた異物を排除しようとする免疫の戦いではないからです。癌は命を支える細胞の老化に過ぎないからです。)

このように怖い病気の原因がこの文明に何一つないのにもかかわらず、病気、病気という言葉が語られずにして一日も過ごせなくなっています。しかもその病気の実態は何もないのです。このように病気の原因を解明することから病気を理解していく必要があるのですが、そのような努力は全くされなくて無知な一般大衆を脅かす“病気病気病気病気”という言葉の幽霊が日本列島を徘徊しています。

真実の最後に残された病気の原因は、人間が食べたくもないし飲みたくもない異物だけしかないのです。それは何でしょう？まさに化学物質なのです。人類は 7500 万種類以上の化学物質を合成し、地球上に撒き散らしました。毎日毎日 15000 種類近くの化学物質を作りつつあります。皆さん、このような化学物質を食べたいと思いますか？飲みたいと思いますか？誰一人として NO でしょう。だけでも、否が応でも毎日飲食物に入り込んでいるのです。江戸時代の 100%純粋な化学物質が混ざらない飲食物を摂取しようと思えば、タイムトンネルにでも乗って、150 年近く前にまで戻るしかありません。不可能です。にもかかわらず医学者は最後に残された病気の原因は化学物質だと認めないのでしょうか？

もし化学物質が原因であることを医学者が認めてしまうと、責任問題が出現します。化学物質を作った化学会社が責任を取らざるを得なくなります。つまり補償の問題が出ます。東大の医学部の教授がアレルギーと膠原病の原因は全て化学物質だと言い切り、私のように証明してしまったら、医薬業界はどうなるのでしょうか？化学製品製造メーカーはどうなるのでしょうか？自動車メーカーはどうなるのでしょうか？いや、文明はどうなってしまうのでしょうか？だからこそアレルギー・膠原病の原因が化学物質であることがいえないのです。そればかりか、自分の免疫が自分を攻撃しているなどという支離滅裂な自己免疫疾患などという病気を捏造しだしたのです。私はしがたい一介の開業医ですから真実を語れるのです。偉い医学者でなくて本当に良かったと思います。ワッハッハ！

まさにこの化学物質こそが、現代最も多い病気であるアレルギーと膠原病の原因物質であるのです。この真実を世界中のどの医学者も口にしません。これ以外にいつまでもいつまでも人体に侵入し続ける異物は他にあるのでしょうか？考えてください。そうです、ヘルペスウイルスしかないのです。ヘルペスウイルスについては[ここを読んでください](#)。神経に住み着いたヘルペスウイルスを免疫は殺しきることはできないのです。免疫がヘルペスウイルスを見つけたときだけは殺そうとして様々な神経炎症状が出るのです。突発性難聴しかり、メニエール氏病しかり、ブドウ膜炎しかりであります。あらゆる神経において、無数の様々な神経炎症状の原因はヘルペスであることを世界中のどんな医学者も認めようとしません。もし認めたら化学物質がアレルギーや膠原病の原因であるということを認めたときに生じた同じ責任問題が発生してしまいます。つまりどうしてヘルペスが増えたのかという問題が出てくるのです。ヘルペスを増やしたのは、まさに製薬メーカーの作った解熱剤、鎮痛剤、免疫抑制剤だということがバレてしまい、補償問題が出ます。最後は、製薬メーカーはつぶれ、製薬メーカーが作る薬も、薬を出す病院も医者も全てつぶれてしまいます。こんな事態を避けるためにも、口が裂けてもヘルペスが現代の病気の最大の原因であるということをしゃべることはできないのです。本当に免疫を上げる漢方を知って良かったなと思います。ワッハッハ！)

今日はここまでです。2013/05/09

私たちは途方に暮れました。仕方なく入院の申し込み手続きを済ませてその日は家に帰りました。

帰宅してから、何とか他に方法がないか主人が夜通しネットで調べてくれました。たくさんの病院に電話で問い合わせてくれましたが結果は同じでした。ネットで情報を探していると、珍しい難病とされているにもかかわらずたくさんのブログや投稿を見つけました。そしてその多くはステロイド治療を受けた結果、恐ろしいステロイドの副作用や繰り返す再発に悩まされるもので、同じ病にかかった者として、目を覆いたくなるような内容でした。

ステロイドしか方法を見出だせないなか、私にはひとつの希望がありました。松本医院の存在です。

(現在の医療の支配者は誰でしょうか？いわずと知れた製薬メーカーです。医療を患者に直接実践しているのが医者であるにもかかわらず、なぜ製薬メーカーが医療界を支配できるのでしょうか？金です。患者一人ひとりを診ている医者は製薬メーカーに比べると微々々々たる金しか持っていませんし、微々々々たる収入しかありません。世界で最も金を稼いでいる製薬メーカーはご存知のファイザーです。毎年毎年7兆円も稼いでいます。世界中の製薬メーカーの売上げのトータルは毎年80兆円を超えています。あらゆる世界中の業界の中で、トータルで80兆円も売上げる業界は唯一薬業界だけです。ダントツの売上げであります。しかもその儲けは売上げの20%近いと言われていています。

世界の資本主義はアメリカが指導している資本主義の世界ですから、金を持っている業界が世界を支配しているといえます。資本主義、つまり金の世界を支配しているという意味は一体何なのでしょう？金で政治を支配し官僚を支配し、かつ経済界を支配し、かつ学問界を支配し、一般市民を含む全ての人間を支配しているという意味です。言い換えると、金で人は動くという意味です。7兆円近く売上げているファイザーは、利益率が20%近いので純利益は1兆円を優に超えています。まさにアメリカ産業界のボス企業がファイザーなのです。

最近も私の母校の京都府立医大の循環器の松原弘明教授が辞めさせられました。なぜでしょう？世界第2位の製薬メーカーであるノバルティスから4億6000万円も研究費をもらって、ノバルティスが開発した高血圧の薬のデータをノバルティスに都合よく改ざんしたことが内部告発でバレてしまったのです。毎年6兆円も売上げるノバルティスにとっては4億6000万円などというのは鼻クソです。しかし一介の公立の大学の教授の松原先生にとっては目の玉が飛び出して死ぬまで引っ込むことがないような絶対に一生でも稼げない大金です。このように世界の大企業が新薬を売り出すために、あらゆる医学会にお金をバラ撒いて医学会のボスたちを籠絡させ、真実をゆがめて金儲けに日夜励んでいるからこそ、これだけ医学が進んでいるにもかかわらず病気が増え続けるのです。ひとたび金をもらおうと真実などというのはどうでも良くなるのです。人間は真実のために生きているのではなくて、エゴの快樂のためにだけ生きられるので当然といえば当然のことです。悪事がばれない限りは、であります。資本主義が続く限りは後進国であろうが先進国であろうが、この汚い真実は永遠に人間社会を支配し続けるでしょう。残念です。愚かな大衆は世界の民主主義が世界を動かしていると錯覚しているのです。民主主義などは金の前ではクソ食らえなのです。

ちなみに2011年の世界の製薬メーカーの売上げランキングと、日本の製薬メーカーの売上げランキングを参考のために下に掲載しておきましょう。日本の武田製薬は世界ランキングでも2兆円を売上げて13位に入っていますが、免疫を上げる薬は一切作ることはできないどころか、免疫を抑えることによって病気をどんどん日本で一番作り出している製薬メーカーといえます。

最近出たベンジャミン・フルフォードによって書かれた「人殺し医療」には、生々しい病気作りの詳細が書かれていますので、ぜひお読み下さい。病気を治さなければ薬代を払う必要はないという法律ができない限りは、ますます薬が病気を作り、いかに医学が進んでも永遠に病人が増えるだけで、医学の進歩も製薬メーカーが金を儲けるためのキャッチフレーズに過ぎないことがお分かりになるで

しょう。iPS も癌を作るために莫大な医療費を増やすだけであることもお分かりになるでしょう。悲しいことです。病気を治すのは自分の免疫だけであることをどの医学者も愚かな大衆に教えることをしないので、愚かな大衆はますます医薬業界の餌食になるばかりです。皮肉を言わせてもらえば、無知は罪ですから、無知な愚かな大衆は医薬業界から知らないうちに合法的な医学的リンチ（私刑）を受けるべくして受けているのかもしれない。ワッハッハ！

ついでに言わせてもらえば、世界の薬の売り上げ 80 兆円のうち、必要な薬は3つしかありません。ワクチンと抗生物質と抗ヘルペス剤だけです！残りは無用の長物です。漢方煎剤だけは別枠です。なぜならば漢方煎剤は製薬メーカーの工場では作れないからです。その他の薬を認める仕事をしているのも公務員であります。国家に雇われているしがない薄給の役人に過ぎません。製薬メーカーの稼ぎと比べると、一人の医者よりももっと少ない稼ぎしかありません。果たして彼らも真実と正義のために仕事をしていると思いますか？絶対に NO です。

直接患者の病気を治すべき医者自身が、医薬業界の組織の中で金よりも大事な命を傷つけても何の良心の咎めもないときに、薬の認可を認める権限を持っている一介の世界中の厚生省の官僚が、どうして自分が認めた薬の副作用で他人の命が傷つけられて葛藤することがあるのでしょうか？絶対に NO です。ましてやどの国の厚生省の官僚も、医学のことについては無知であり単なる法律家であり行政家であり、薬のことには全く無知であります。結局薬屋と結びついた医者の筋書き通りに動く以外に道はないのですから、薬の許認可については言いなりにならざるをえません。彼らが免疫を抑える意味を知るはずもありません。薬の許認可権を一手に独占している日本の厚労省の官僚も、アメリカの FDA の官僚も、巨大製薬メーカーであるファイザー、メルク、ジョンソン&ジョンソン、イーライ・リリー、アボット・ラボラトリーズなどの社長にプレッシャーをかけられて、拒絶できる人がいるでしょうか？おそらく無理でしょう。こっそり 10 億円出すから新薬を認めてくれと言われたら、あなただったらどうしますか？いや 50 億円出すから認めてくれと言われたら？このようなやり取りが可能なのが薬業界なのです。いや資本主義の世の中なのです。残念です。国家が国を支配しているのではなくて、世界の多国籍大企業が国家を支配しているのです。TPP はまさに大企業のためにあるのです。TPP での取り決めは国家の法律では覆すことができないのです。

なぜこんなことが起こるのでしょうか？答えは簡単です。病気を薬が治さなくても、効く薬とか良い薬だと宣伝できるからです。薬は効くから価値があるのではなくて、病気を治すからこそ価値があるのにもかかわらず、です。先進国は遅かれ早かれ、いやもう既に、と言ったほうがいいのか知りませんが、いわゆる病気を作る社会主義的ヘルスケア関連の支出により国家財政が破綻してしまうことになるでしょう。病気を治すのに薬などは要らないのです。病気を治せるのは、全ての人間に与えられている免疫の遺伝子だけであることを自分に言い聞かせ続けてください。）

2011年 製薬メーカー売り上げランキング 世界市場

(1 ドル=100 円とを考えてください。100 万ドルは 1 億円とを考えてください。)

順位	メーカー名	国名	2011	前期比	R&D 費 (研究開発費)	全売上高 (単位:百万ドル)
1	ファイザー	米	57,747	-1.30%	9,112	67,425
2	ノバルティス	スイス	47,925	14.10%	9,583	58,566
3	メルク	米	41,289	3.70%	8,467	48,047
4	サノフィ	フランス	40,607	5.20%	6,041	43,235

5	ロシュ	スイス	36,439	-7.60%	7,632	45,253
6	グラクソ・スミスクライン	英	34,293	-5.10%	6,045	42,321
7	アストラゼネカ	英	32,981	1.40%	5,523	33,591
8	ジョンソン&ジョンソン	米	24,368	8.80%	5,138	65,030
9	イーライ・リリー	米	22,608	4.30%	5,021	24,287
10	アボット・ラボラトリーズ	米	22,435	12.80%	4,129	38,851
11	ブリistol・マイヤーズスクイブ	米	21,244	9.00%	3,839	21,244
13	武田薬品工業	日	17,556	7.20%	3,642	19,495
12	テバ製薬工業	イスラエル	16,689	3.50%	1,095	18,312
14	アムジェン	米	15,582	3.50%	3,116	15,582
16	ベーリンガー・インゲルハイム	ドイツ	13,976	4.40%	3,072	17,055
15	バイエル・ヘルスケア	ドイツ	13,774	-0.30%	2,015	47,300
17	アステラス製薬	日	12,523	1.60%	2,452	12,523
19	ノボ・ノルディスク	デンマーク	11,557	9.20%	1,677	11,557
18	第一三共	日	11,535	-3.20%	2,391	12,128
21	大塚ホールディングス	日	10,106	4.10%	2,057	14,917
22	ギリアド・サイエンシズ	米	8,385	5.50%	1,229	8,385
20	エーザイ	日	8,014	-16.40%	1,616	8,372
24	バクスター・インターナショナル	米	8,014	6.40%	946	13,893
23	メルク・セローノ	ドイツ	7,666	2.90%	1,580	13,306
25	マイラン	米	6,106	13.00%	295	6,130
26	田辺三菱製薬	日	5,066	-0.70%	907	5,260
28	バイオジェン・アイデック	米	5,049	7.10%	1,220	5,049
27	セルビエ	フランス	4,985	6.90%	1,246	4,985
29	中外製薬	日	4,826	-1.60%	722	4,826
38	セルジーン	米	4,823	33.60%	1,600	4,842

2011年 製薬メーカー売り上げランキング 国内市場

(武田製薬は世界第13位の売り上げを上げています。年間2兆4000億円も売り上げています。)

順位	メーカー名	売上高(億円)	前年度比
1	武田薬品工業	5,922	2.4
2	ファイザー	5,592	19.3
3	アステラス製薬	5,399	2.7
4	第一三共	4,098	△1.5
5	田辺三菱製薬	3,554	△1.7
6	MSD	3,465	
7	エーザイ	3,311	6.4

8	大塚ホールディングス	3,264	2.3
9	中外製薬	3,240	△5.4
10	ノバルティスファーマ	3,156	6.4
11	サノフィ	3,153	10.6
12	グラクソ・スミスクライン	3,198	21.6
13	アストラゼネカ	2,317	7
14	日本ベーリンガーインゲルハイム	1,998	23.2
15	大日本住友製薬	1,950	△7.6
16	バイエル薬品	1,649	1.3
17	塩野義製薬	1,643	3.4
18	日本イーライリリー	1,594	18.6
19	小野薬品	1,371	7.9
20	ノボノルディスクファーマ	9825	4

原田病を発症する3ヶ月前の9月、私は松本医院を訪れていました。受診理由は顔に出来た広範囲の黒いシミ。そのシミの始まりは2012年の2月、美容室で髪を染めたとき、ヘアカラー剤にアレルギー反応を起こした時からです。顔まわりの皮膚が痒みを伴い赤くただれたので近くの皮膚科を受診しました。妊娠を希望していたのでステロイドではない塗り薬を処方してもらいました(あとから調べると私の塗っていた薬はプロトピックという免疫抑制剤でした)。(愚かで無知な一般大衆は、ステロイドがなぜ悪いかということさえ知りません。私が「一般大衆が愚かで無知である」と言い続ける根拠はどこにあるとお考えですか？答えは極めて簡単です。「なぜ」という言葉を忘れてしまっているからです。例えば「ステロイドは良い」と医者と言います。それでは「なぜステロイドが良いのか？」という質問をした患者がいるのでしょうか？逆にステロイドを使ってきた人は、その副作用を知って「ステロイドは悪い」と言います。なぜと聞くと、「ステロイドで病気が治らないし、ステロイドは副作用があるから」と答えます。ところがそれ以上は考えようとはしません。「なぜステロイドは病気を治せないのか？」という、「なぜ」という疑問を発することがないからです。「なぜステロイドは副作用を起こすのか」という疑問を発することもないのです。もちろん素人である一般大衆はこのような答えを知るすべを知りません。だから愚かなのです。大衆が医療に愚かであるのは当然のことなのです。だからその他大勢の大衆なのです。

ところが学問はこのなぜを徹底的に追究すべきではありますが、医学は金さえ儲ければ患者がどれだけ苦しもうが全く気にしないというのが現代の医学のレベルなのです。私はこの「なぜ」を徹底的に解明すべく、毎日診療の傍ら「なぜ」を解く努力を続けています。この「なぜの答え」をホームページでお伝えしているのです。このなぜに対する真実の答えは、多くの場合金を儲けている人にとっては都合の悪いことが出てきます。つまり真実を明らかにしてしまうと金が儲からなくなるので、誰もやろうとしないどころか、真実の答えを出しても公にしないのです。

ブドウ膜炎の原因がヘルペスウイルスであるというのは、東大の眼科の先生のみならず、まともな医学者であれば知っているのですが、言えないのです。言ってしまうと病気を作って金を儲けることがなくなります。病気を作らない限りは医薬業界の繁栄はなくなりますから、あこぎな病気作りに医者は日夜励んでいるのです。このような真実はあちこちの分野で広がっています。このような例をいくつか挙げましょう。

様々な才能、例えば運動能力、音楽の才能、絵の才能、数学的才能、記憶の才能、理解の才能など、脳にかかる才能は全て遺伝なのです。つまり脳の神経細胞の遺伝子が優れているのです。遺伝子を少し勉強すればすぐに分かることですが、決して遺伝子学者は言いません。なぜでしょう？その生まれながらの違いを認めてしまうと、現代の競争社会においては生まれた時点で既に勝者と敗者が決まってしまうと思ひ込むからです。全ての人間の才能は努力なしでは実現しないことも忘れてしまっているからです。東大に受からないからといって、その人の人生が終わりになるわけではないのです。

確かに才能のある人はお金をたくさん儲ける機会が増えます。しかしながらお金が全てを支配しているわけでもありません。お金よりも大事なものは3つあります。命と真実と心のあり方です。現代の医療に従事している医者たちは自分の金のために他人の命と真実を否定し去っています。さらに真実を一番大切にすべき心のあり方を金のために放り去ってしまっています。心のあり方で最も大事なものは永遠の真実を見極め、真実を大切にし、それを伝えていくことです。この世の最も偽善的で嘘に凝り固まった汚れた世界は医薬業界です。残念です。

さらに生まれたときに一人ひとりの人間に与えられた遺伝子が才能、美貌、性格を決めているという真実が認められると、見掛けは人間は生まれながらに全て平等であるといったところで、真実は遺伝子が全て異なるわけですから、具体的に何が平等であることを説明できないので、実際には必ず差別という問題が起こってきます。愚かな大衆は、現代は差別のない社会だと思ひ込んでいますが「アホなことを言うな」と言いたいのです。東大や京大に入れる人や、イチローや松井や長嶋は才能が高い人です。しかし世間はまるで努力すれば全ての人が東大や京大に入れ、イチローや松井になれるものだと言ひ続けます。これは真実ではありません。

それではなぜ差別が生まれるのでしょうか？この答えも簡単です。人間は快楽を最大限にするために生きているエゴなる存在ですから、差をつけられると自分の快楽の量が減るということを知っているからです。そこに嫉妬が生まれ、怒りが生まれ、優越感やコンプレックスが生まれてくるのです。しかし人間が遺伝子で成り立っている以上、つまり生まれもった遺伝子を変えることができない以上、全ての能力や性格や美貌に差があるのは当然なことです。この真実を覆い隠し続ける限りは人間のエゴには安住の地がありません。自分よりも優れた遺伝子を持っている人間に対して、毎日毎日嫉妬や憎しみを感じ、他人に責任を押し付け、幸せは遠のくばかりです。

どうすればこのような心のあり方を変えることができるのでしょうか？答えはただひとつ、他人の幸せを否が応でも喜んであげることです。自分が欲しいものを持っている優れた他人を無理やりにでも喜んであげることです。差があつて当たり前だと認めることです。私はこれを毎日実践しています。他人の幸せを自分の幸せと同じように感じることであれば、ストレスがなくなります。ストレスがなくなれば、自分の副腎皮質から作り出しているステロイドホルモンも減ります。そうすると免疫が落ちることがなくなります。

アレルギーが膠原病になるのは、ステロイドホルモンによって抗体がIgGからIgEになりにくいためですから、ストレスが減れば膠原病もアレルギーとなって治ってしまいます。かつストレスホルモンであるステロイドホルモンが減れば、人体の神経に隠れているヘルペスウイルスも増えることがなくなってしまうのです。するとヘルペスウイルスと戦う必要もなくなり、あらゆる神経症状も消えてしまうのです。[ヘルペスはこちらを読んでください。](#)もちろんブドウ膜炎も起こりません。言うまでもなく、ブドウ膜炎の患者も、ブドウ膜炎が簡単に治ってしまうのです。)

一時的には良くなったのですが、その後赤み痒みはぶり返し、しまいには顔色まで悪くなり、周囲から内蔵が悪いのではないかと指摘されるようになりました。評判の良い皮膚科を教えてもらい2件ほど

行きましたがどこも曖昧な返答で30代40代の女性に見られる肝斑というシミだろうと言われ肌を白くするハイドロキノンという塗り薬とトランサミン錠とビタミンCを処方され、それを半年服用し続けました。それでも状態は改善されなかったのどこかに良い漢方医はいないか探していると松本医院のHPを見つけ受診していたのです。(ハイドロキノンもトランサミンもビタミンCも何の意味もないことです。毛染め化学物質によるアトピーですから、この化学物質を排除しようとして免疫がアトピーを起こしたものですから、症状は正しかったのです。にもかかわらず、漂白剤であるハイドロキノンを使うなどというバカな薬を使わせるのが現代の皮膚科の間違ったやり方です。病気を治すにはまず原因を知るべきですが、今の医学は一切原因を問いません。つまり「なぜ」という発問をしないものですから、医学は医学ではないのです。シミも私の漢方煎剤によって化学物質と一緒に排除しているので、完治まではあと一息です。この世に治らない病気は何一つとしてないのです。もちろん私が治すわけではありません。患者の免疫の遺伝子の働きが全ての病気を治してくれます。私のことを漢方医とっているようですが、一番正しい私の名称は“免疫臨床医”というべきであります。もっと正しくは“患者の免疫が治す手伝いをしている並みの医者”というべきです。医者などという仕事は大した仕事ではないのです。もちろん手術とかをする外科医は別です。彼らは“優れた人間大工”というべきでしょう！ワッハッハ！

ここでハイドロキノンがどんな薬かについて掲載しておきましょう。とんでもない恐ろしい化学薬品ということが分かるでしょう。だから治らないのです。)

用途

合成や写真の現像において還元剤として用いられる。また重合防止剤及びその原料、染料の原料、ゴムの酸化防止剤原料、エンジニアリングプラスチック原料、農薬原料等としても利用されている。ヒドリドを放出してベンゾキノンとなる事ができるため、ヒドリド源としても用いられる。医薬部外品として美白剤として処方されている。これら製品の使用中および使用後はサンスクリーンの使用や肌を守る為の衣服の着用が勧められている。

美容分野でのヒドロキノン (ハイドロキノン)

医薬部外品としてのヒドロキノン (皮膚薬の場合はハイドロキノンと呼ばれることのほうが多い) は、その強力な漂白作用を利用したもので、美白剤として皮膚科などで処方されるほか、薬局などでヒドロキノン配合の軟膏・クリーム等が市販されている。市販のヒドロキノン剤は通常2%~4%程度の濃度のものが多い。アメリカ食品医薬品局(FDA)では2%以上の濃度はドクターの管理下により処方されている。

ビタミンAの一種であるトレチノインと併用することで、皮膚の漂白効果がより高まるとされ、クリーム製剤が市販されている。

東京工業大学と新潟薬科大学の研究グループによりヒドロキノンとセタルコニウムクロリド

(benzylcetyldimethylammonium chloride、BCDAC) などの界面活性剤との結晶性分子錯体が開発され、その錯体中でヒドロキノンの安定性が向上しかつ徐放性を持たせられた¹⁾。酸化・変質しにくい性

質を利用して「新型ハイドロキノン」「安定型ハイドロキノン」などの名称で化粧品などに配合されている。

煎じ薬と漢方の塗り薬をいただいて、2ヶ月ほど毎日飲み続けました。顔色の悪さは改善されて行きましたが色素沈着はなかなか取れずその内忙しくなり思う時間に薬が飲めなくなり、少しの間治療が中途半端になっていました。このような経緯の後、発症したのです。

このとき松本医院でステロイドの恐ろしさを教えてもらっていたので、何とかステロイドは避けたいと言う強い思いがあったのです。また、このとき非常に無知でまさか原田病の治療を引き受けてくださると思っていなかったのが最後の最後まで先生に頼る事を思いつきませんでした。(私は全ての病気を治すことができます。何回も言っているように、私が治すのではないのです。患者の免疫の遺伝子で治すのです。先ほども、才能も性格も美貌も全て遺伝子で決まっていると述べましたが、まさに病気を治すのも患者の免疫の遺伝子なのです。この遺伝子をなきものにしようという良からぬ集団があります。それが薬学者であり医学者であり製薬メーカーであるのです。一切患者の免疫の邪魔をしない限り、体の免疫が病気の原因を、殺すか、排除するか、神経節に押し込むか、共存するかの4つの方法で処理してくれるのです。ただし癌は病気ではないので、私は治すことができません。しかし、癌も免疫の働きにより、起こりにくくしたり、縮小させたり、転移しにくくさせたり、さらに延命効果をもたらすことができるものだということが分かりました。いずれこのような目的のために、漢方や鍼灸を駆使する中国医学を用いて癌治療の分野にも免疫を高める治療を始めようかと考えています。)

火曜日の朝、診療時間になってやっと松本先生と電話で話すことが出来ました。大学病院へ入院予定の1時間前の出来事でした。最後の望みを懸けて事情を説明すると、先生はすぐに「来なさい。」と言ってくれました。入院治療をキャンセルして主人と母と3人で松本医院へ急ぎました。(入院して大量のステロイドを入れられて、その間はヘルペスと免疫の戦いが一時的には消えるので、網膜神経細胞の炎症は一時的には消滅してしまいます。愚かな大衆は良くなった良くなったと喜ぶのですが、ところがどっこい、そうは問屋が卸しません。なぜならば、ステロイドを使っている間に網膜神経細胞にヘルペスがどんどん増え続けていることを、ドアホな眼科医は一言も患者に説明しないのです。もちろん患者も医者以上にドアホですから、だまされるのが関の山となります。だから私はすぐに「来なさい」と言ったのです。この患者さんが立派なのは、素直に私の言葉に耳を傾けたことです。この素直な心と私の免疫の理論を理解する賢さがいまって、彼女をめくらにすることを彼女自身が引き止めることができたのです。この文章を読まれてもお分かりのように、彼女はとても聡明な女性です。興味があるので、どこの大学を卒業したのかと聞くと、やはり一流の私立大学でした。大学を出なくても優れた頭脳と理解力を持っている人がいることは言うまでもありません。)

この時の私の目の状態は鏡に映る自分の顔も確認できないほどだったので、診察してくれている見覚えのあるはずの先生の顔もまったく見えませんでした。そんな状態で、失明の不安に襲われていた私に先生は「死なない限り病気は治るし、失明しない限り目も元に戻る」と他の医者からは絶対に聞くことのできない希望にあふれる言葉をくれました。(だって、ヘルペスが原因であるということが分かっており、はじめに書いたように、ヘルペスとの戦いで完全に盲目になることは絶対にありえないからです。私は何も彼女に希望を与えるために言ったわけではないのです。「死なない限り病気は治るし、失明しない限り目も元に戻る」という真実を自然に語りかけただけです。世界中の医者たちは製薬メ

一カーにお金をもらって患者の無知につけ込んで、間違いだらけの医学を教え込み、薬を投与して病気を作って金儲けをするために脅かし続けます。

私の患者で賢い大学の教授の先生が面白いことを言ってくれました。「この世には3大脅迫業界がある」と。「まず第1は医療業界、第2は教育業界、第3は保険業界である」と言っていました。彼も教育業界で学生に教えているわけですが、彼はひょっとすれば“教育界の松本仁幸”であるかもしれませんね！教育もいかに教える先生が優れていても、それを学び取る学生がアホで勉強をしなければどうにもなりません。従って彼も学生には「自分で勉強しなければ賢くならない」と言っておられるはずです。）

本当に救われる思いでした。

散々原因不明の病気であると言われてきたのに、原因不明の病気など存在しないと言われたことも驚きで、ただの不運ではなく、自分が病気になった理由を深く考えるきっかけを与えられました。

そしてヘルペスが原因であろうと診断され、抗ヘルペス剤と煎じ薬をいただいて帰りました。(医学が進み、公衆衛生学も進みきっている先進国である日本においては、慢性的な病気の原因はたった2つしかありません。ひとつは化学物質であり、ふたつめはヘルペスだけであります。化学物質はIgEで免疫が戦うときはアレルギーを生み出し、IgGで戦うときは膠原病を生み出します。膠原病は間違っ
て自己免疫疾患といわれますが、実は自己免疫疾患などはないのです。これについての論文は[ここを読んでください](#)。従って彼女の目の病気は、ヘルペス性網膜神経炎と名づけるべきものなのです。ブドウ膜炎の成り立ちについては、はじめに書きましたから読み返してください。)

薬を飲み始めた翌日からそれまではなかった頭痛とだるさに襲われました。24時間頭が痛くて夜もほとんど眠れず、怖い夢ばかりみて4日間ほぼ寝たきりの状態が続きました。(漢方で目の免疫を上げ、かつ抗ヘルペス剤でヘルペスを増やさせないようにすると、戦いがしやすくなり、激しい戦いが網膜神経細胞で生じるのみならず、それまで彼女が増やし続けた脳の血管神経細胞に潜んでいるヘルペスをも免疫が殺そうとします。かつ眠れないのは交感神経に増え続けたヘルペスをも彼女の免疫がやっつけようとするときに出ることがあります。いずれにしる症状は良いことなのです。原因が分かっている以上は、病気は良いことなのです。原因の分からない病気は生まれつきの遺伝子病しかありませんし、つまり原因の分からない病気は何も他にないものですから、病気は免疫が正しく働いている証拠であり、最後は必ず免疫が正しく処置してくれますから、ますます治るために異物を処理しているだけの話ですから、病気こそ万歳と言うべきです！免疫の働きが最高度に活躍するのは寝ているときです。免疫を上げたければ、自然に寝ることです。確かに脳の血管神経でヘルペスと免疫が戦うときに、怖い夢を見るという人が何人かいました。これも世界中の他の医者が誰一人として知らない私が発見した真実です。)

お風呂の時間だけが唯一癒されました。長風呂好きではなかったのですが、明かりを消して二時間でも三時間でもつかっていました。見えないという事を忘れられる時間でした。家の事と身の回りの世話は母親がしてくれました。三度の食事も玄米食でバランスを考えて用意してもらい、あんなに規則正しい食生活は随分と久しぶりでした。(『あんなに規則正しい食生活はずいぶん久しぶり』と書いていましたが、彼女は仕事をむちゃくちゃに頑張りが過ぎていたのです。その間に交感神経が刺激され、アドレナリンをだし、かつ副腎皮質ホルモンを盛んに出し続け、免疫を抑制している間に、ヘルペスウイルスがどんどん網膜神経細胞のみならず脳の神経細胞にも増え続けていたのです。だからこそ免疫が回復するとともに激しい症状が出現したのです。)

5日目の朝、いつもより気分が良かったので主人が散歩に連れ出してくれました。久々に味わう外の空気と太陽の光がとても心地よく、この日は横になることなく一日中起きていました。

一週間後2回目の通院の時、なんと前回全く見えなかった先生の顔が見えるようになっていました。その後症状はめまぐるしく変化して行きました。身体的な症状としては頭痛が和らいでいくと共に難聴、めまい、耳鳴りや全身の倦怠感などがありました。暫くすると症状は緩和され、気がつくとなくなっていると言う感じでした。(さらに第8脳神経である、内耳神経の前庭神経と蝸牛神経に潜んでいたヘルペスウイルスをも同時に免疫が殺し始めたのです。まさにメニエールと呼ばれる症状が出現したのです。メニエールはここを読んでください。全身の倦怠感第10脳神経である迷走神経の副交感神経に潜んでいたヘルペスと免疫が戦いを始めたのです。まさに彼女の脳神経はヘルペスだらけであったのです。免疫がヘルペスをこれらの神経で見つけるたびごとに症状が出たのです。良いことなのです。増えてはいけないヘルペスを自分の免疫で殺すことが悪いはずはないでしょう。)

目の症状は始め、大きく歪んでほとんど見えていなかったのが、次第に網膜の炎症が収まり、歪みが小さくなり見える範囲が広がって行きました。目の中でもヘルペスは次々場所を変えて戦っているようで、様々な見え方としてあらわれました。最初の頃は暗がりでは真っ暗に見えて夜一人で歩けなかったり、反対に室内でもサングラスをしないと眩しさに耐えられなかったり、画質の悪いテレビのように写ったり、視界に常にチラチラした光があったりもしましたが、いずれの症状も次第に緩和されて行きました。(目の神経、つまり網膜神経細胞は2種類の神経からできています。ひとつは明かりや色の判別をする錐体細胞ですが、暗いところでは働きにくいのです。ふたつめは明暗を認識する桿体(杆体)細胞ですが、感度が高いのです。これらの細胞から情報が脳に伝わり、明確な色と形を持った物体として認識されたときに、目が見えるというのです。まず暗がり一人で歩けなかったのは、傷ついた錐体細胞が明かりを認識できないためであり、逆に室内で眩しくなったのは、錐体細胞が明かりの調節ができないためです。一方、大きく形が歪んで見えたのは、傷ついた桿体細胞が主な原因です。

人間が外部から得る情報の90%以上は視覚から得られます。従って最も重要な感覚器官であります。人間が最も困るのは目が見えなくなることです。盲目になることは人間にとって死を意味するかもしれません。人間だけではありません。全ての動物にとって、視覚ほど大切な感覚器官はないといっても過言ではありません。生き続けるために必要な外部からの情報を視覚で処理するために、動物は眼球を極めて精密な器官に進化させてきたのです。ブドウ膜炎や原田病と診断された患者さんは、目が見えなくなると脅かされ、治りもしないのに否応もなくステロイドを投与されてしまいます。この手記のコメントで、人間の目は網膜の全ての神経細胞が死なない限りは盲目になるわけではない説明をしましたが、さらに詳しく人間の視覚について述べる価値があるので、再び勉強し直しましょう。

最近も Apple から“Retina ディスプレイ”というモニタが発売されました。この Retina というのは網膜という意味ですが、人間の目の網膜に代わるほど精細なモニタという意気込みで名づけられたものでしょう。この網膜から説明していきましょう。網膜はあらゆる角度から瞳を通して入ってきた光をキャッチできるフィルムであります。つまり光の信号をフィルムに投影し、これを電気信号に変える特別なフィルムが網膜といえます。この網膜がボール状の眼球の内側の3/4にはり付けられています。この膜の中に700万個の錐体細胞と7億個の桿体(杆体)細胞が存在しています。

皆さん、iPSの人体実験が初めて行われようとしています。iPSはどんな細胞に再生されるのかをご存知ですか？加齢性黄斑変性症に対して行われる予定でありましたが、癌になる危険度が高いということで今回は見送られました。この黄斑変性症とは一体何なのでしょう？この黄斑にはどんな細胞が

あるでしょうか？実は錐体細胞がこの黄斑と呼ばれる網膜の中心にあたる部分に最も多く集まっており、眼底鏡で診ると、ほぼ眼底の中央部に黄色を帯びた領域が観察されるので黄斑と呼ぶのです。言い換えると、錐体細胞が集中的に集まった部分が黄色く見えるのです。この錐体細胞は高い視力と色の感覚を識別することができるのです。一方、この黄斑には桿体(杆体)細胞が少ししかないのです。この桿体(杆体)細胞は、暗い場所で働くことができます。

人間の目は元来、光のある明るいところで働くべきものですから、一番ものが見えやすい黄斑部が変性すると、ものが見えなくなってしまうのです。暗いところを見る必要はないので、桿体(杆体)細胞は黄斑部には少ないのです。ところが、錐体細胞よりも桿体(杆体)細胞が 100 倍も多いのは、わずかな刺激を少しでも見えるように桿体(杆体)細胞が多くならざるをえなかったのでしょう。

網膜の光感受性受容器である桿体(杆体)細胞と錐体細胞の分布は異なるのは当然なのです。明るい光を受けて働き、明所視をつかさどる錐体細胞は眼球の中心である黄斑部に多く存在しており、この黄斑部を中心窩といいます。錐体細胞の密度はこの中心窩から離れると速やかに減少します。黄斑部（中心窩）に高密度に存在している錐体細胞の情報は、視覚情報の統合をあまり受けずに視神経乳頭から脳へ出て行く視神経へ伝えられることによって、脳へ伝えられる画像の分解能が最も高くなっています。一方、桿体(杆体)細胞は中心窩を取り巻くように網膜周辺部に多く存在し、暗い場所で働き、暗所視をつかさどるのです。

iPS を新たに入れ替えようとしているのは錐体細胞なのです。この黄斑変性というのは、黄斑部に限局した網膜の変性を指すのですが、実は網膜全体に変性があり、その変化が特に黄斑部に強いものが黄斑変性と呼ばれるのです。言い換えると、黄斑変性とは錐体細胞の変性と言ってもよいのです。従って iPS が加齢のために黄斑部の錐体細胞と成功裏に入れ替わっても、周辺の錐体細胞も変性しているので、完全に目が元に戻ることはないと思われます。

皆さん、ここで加齢という意味を考えてみましょう。加齢とは何でしょうか？一言で言えば、生まれ持った遺伝子の正常な働きがなくなったということです。つまり老化した細胞の遺伝子は癌遺伝子にはならないのでありますが、生まれ持った遺伝子が傷つけられて修復されなくなり、遺伝子の設計図によるタンパク質が正常でなくなった状態といえます。つまり正しいタンパク質を作ることができない状態が様々な細胞で起こり、廊下が生じるのです。その一番大きな原因は、まず細胞が分裂するときに DNA が正しく転写されないことです。次に食べ物や水に含まれている化学物質や、自分自身が代謝した産物などが遺伝子を傷つけることです。最後は紫外線や放射線などにより遺伝子が傷つけられることです。もちろんよく言われているように、人間は細胞分裂を行うたびにテロメアという染色体のしっぽについての DNA が減っていき、最後は分裂が不可能になり、老いさらばえていくことは言うまでもありません。いずれにしろ癌にはならないのですが、長く生きれば生きるほど遺伝子の傷が修復されないために老化が起こったと考えられるのです。加齢は人間の宿命であり、大金をかけて治療する必要はないと考えますが、皆さんどのようにお考えですか？

錐体細胞は明るい光に反応し、かつ光の三原色である、赤・緑・青の光に反応できる 3 種類の錐体細胞があります。網膜の細胞は、視細胞といわれる錐体細胞と桿体(杆体)細胞以外に、内側にあと 2 種類の細胞の層があります。（眼球の中の内外の区別は後で詳しく説明します。）双極細胞の層と神経節細胞の層があります。双極細胞は錐体細胞や桿体(杆体)細胞からの情報を受け取り、神経節細胞に渡します。情報を受け取った神経節細胞は長い神経軸索を持っており、この軸索を通じて情報を脳に伝達します。つまり神経節細胞からの神経線維は、脳の視床、視床下部、さらに中脳の上丘へと伝わっていくのです。

ここでさらに詳しく人間を含めた脊椎動物の網膜の構造について述べておきましょう。実は先ほどは

網膜は3層に分かれているように簡単に書きましたが、さらに組織学的に詳細に分類すると10層に分けることが出来るのです。皆さん、実は網膜の構造を正確に理解することは難しいのです。それは、まず網膜の構造を説明する際に、「眼球の外側・内側」とかあるいは「網膜の内側・外側」という言葉の「内・外」の理解に戸惑うからです。なぜ「内・外」の理解が難しくなるのでしょうか？皆さんは、光は外側から瞳を通して眼球の内側に侵入してくると考えておられますね。これは正しいのですが、それでは眼球の中の「内側と外側」とは一体何を意味するのでしょうか？

これを理解するために、ぶ厚い皮の風船に空気が入った状態を思い浮かべてください。丸い眼球を空気が入った風船玉と考えてください。この眼球の風船玉の外側の膜は強膜で覆われているとイメージしてください。皆さん、角膜をご存知でしょう。この角膜を通して光が入ってくることもご存知でしょう。従って、眼球という風船玉は、光が入ってくる前部の強膜だけが角膜に変わり、残りの周りは全て強膜で囲まれてしまった風船玉と考えてください。空気で満たされた部分が内側であり、これが眼球の内側であります。この内側の後部3/4が網膜で覆われているのです。前部の角膜の周辺の1/4には網膜はないのです。大体眼球のイメージができたでしょう。

次に間違いやすい点があります。脳に行く神経線維（神経軸索）がどこにあるかという点です。実はこの網膜の一番内側にあるのです。分かりますか？網膜の一番内側であるということは、眼球という風船の空気に直接接触しているのはこの神経線維（神経軸索）なのです。ここが眼科医でない一般の医者や患者が誤解する点なのです。つまり脳に一番近いところに神経線維があるように思ってしまうのですが、実は脳に一番遠い網膜の表面に神経線維が分布しており、この分布した神経線維が全て集まって大きな神経線維の束となって盲点から脳に入っていくのです。

皆さん、視神経、つまり視神経の神経線維が盲点という箇所から脳につながっているのはご存知ですか？つまり盲点というのは、視神経が脳に入っていく通路であるので、網膜がないのです。従って光がこの盲点に到達しても、光の刺激を感じる網膜がないので見る事が出来ないので。つまり“目くらになる点”という意味で盲点といわれるのです。ご存知のように、黄斑はこの盲点の近くにあります。この盲点というのは、視神経乳頭ともいい、網膜の神経線維が集まって、眼球から脳へと出ていく通路であります。

もっと具体的に説明しましょう。眼球という風船玉の外側は強膜であり、その内側が脈絡膜であり、さらに内側が網膜であり、そのさらに内側に神経線維が分布しているのです。つまり眼球という風船の中にある空気と触れているのは神経線維であると考えてよいのです。眼球という風船玉の外のゴム皮から順番に空気のある内側に向かって、強膜、脈絡膜、網膜があります。この網膜に10層があります。外側から、①網膜色素上皮層、②網膜視細胞層、③網膜外境界膜、④網膜外顆粒層、⑤網膜外網状層、⑥網膜内顆粒層、⑦網膜内網状層、⑧網膜神経節細胞層、⑨網膜神経線維層、⑩網膜内境界膜であります。少し難しすぎますか？光は確かに⑩から①に通るのですが、光を感受し、その情報は①から⑩へと伝わっていくのです。最後はこの情報は、⑨網膜神経線維層から出て行く神経線維から盲点へ束になって視神経によって脳に伝えられるのです。②の視細胞層の中に錐体細胞と桿体(杆体)細胞が含まれているのです。難しいですがついてきてください。

さてやっとならば、ヘルペスウイルスが網膜の神経のどこに隠れているかを本格的に議論できるようになりました。上の説明での、⑧網膜神経節細胞層に住んでいることがお分かりでしょう。神経節に囲まれた細胞という意味で名づけられたのですが、ご存知のように元来、神経節に囲まれている細胞は免疫には見つかりにくいのですが、この神経節細胞から神経線維に増殖したヘルペスウイルスを免疫が見つけると、慢性的な本格的なブドウ膜炎が起こるのです。

網膜は眼球の前部の角膜周辺 1/4 には存在しないことは先ほど述べました。後部の 3/4 にしか網膜はありませんし、従ってヘルペスが隠れることができる神経節細胞も、網膜のない前部にはありません。しかし、皮膚科医や眼科医にステロイドを長期に使われた人たちは、網膜の様々な細胞にもヘルペスウイルスが感染増殖したり、さらに眼球前部の虹彩や毛様体や脈絡膜の上皮細胞にも網膜の神経細胞からヘルペスウイルスが増殖して、そこでも免疫とヘルペスとの戦いが見られ炎症が起こるのです。ちょうどアトピーや喘息で長期にステロイドを用いられてきた人たちのあらゆる全身の末梢神経にヘルペスが増殖すると同時に、あらゆる上皮細胞にもヘルペスが住みつき、またステロイドを大量に塗られた皮膚の表皮細胞にもヘルペスが増殖するのと同じです。

ここまできた以上、目の構造も完全に理解できたので、もっと詳しく光がどのようにして認識されるかについても一度勉強しましょう。光がまず角膜から入り、この角膜から入った光は網膜に照射された光は、まず一番内側の内境界膜側から網膜層を透過し、一番奥の視細胞層にある錐体・杆体視細胞に到達して光が認識され、この情報は内側にある様々な細胞に戻るように伝えられていきます。

網膜には大別すると、視細胞（錐体、杆体）、双極細胞、水平細胞、アマクリン細胞、神経節細胞の 5 つの神経細胞が存在します。光は視細胞で電気信号に変換され、その信号（情報）は化学シナプスを介して双極細胞と水平細胞に伝達されます。双極細胞はアマクリン細胞や神経節細胞とシナプス結合しており、神経節細胞の軸策が視神経として視神経乳頭から出て行き、大脳の視覚中枢に連絡します。

⑤網膜外網状層で視細胞と双極細胞、水平細胞がシナプス結合しており、⑦網膜内網状層で双極細胞とアマクリン細胞、神経節細胞がシナプス形成をしています。④網膜外顆粒層には視細胞、⑥網膜内顆粒層には双極細胞、水平細胞、アマクリン細胞、⑧網膜神経節細胞層には神経節細胞の細胞体が位置しています。

ここでさらに網膜のいくつかの大切な細胞について復習をかねて勉強しましょう。何回か述べていますが、まず一番大事な視細胞といわれる錐体細胞と杆体細胞について述べましょう。ここでも内と外との違いをはっきり区別してくださいね。内は眼球という風船の中側で、外は風船の外のゴムの膜ですからね。

視細胞は、**photoreceptor**（光受容体）とも言います。つまり光を受け取る受容体であります。視細胞は網膜の②網膜視細胞層から⑤網膜外網状層にかけて存在し、光刺激を吸収し電気信号へと変換する役割を持ちます。視細胞には、明所で機能する錐体（cone）と暗所で機能する杆体（又は桿体、rod）の 2 種類があり、錐体には光吸収の波長特性が異なるものがいくつか存在し、波長の長さにより色が区別されるのです。長波長光に感受性が高いものが赤錐体であり、中波長に感受性が高いものを緑錐体であり、短波長感受性が高いものを青錐体といいます。

錐体や杆体の外節と呼ばれる部分には視物質が蓄えられています。視物質は蛋白質オプシンにレチノール（ビタミンA）が結合した色素タンパク質で、オプシンのアミノ酸配列の違いにより吸収波長が異なります。このビタミンAが欠乏すると夜盲症となることはご存知でしょう。つまり杆体細胞の障害のために暗順応の機能が働かなくなるので、夜に見にくくなるのです。

錐体のもつオプシンとしては、紫外型・青型・緑型・赤型の 4 種類が知られる。ヒトの錐体では、視物質として異なる蛋白質オプシンを持つ 3 種類の細胞があります。それぞれ吸収波長が異なっており、L錐体（赤錐体）、M錐体（緑錐体）、S錐体（青錐体）と呼ばれます。これら 3 種類の錐体の興奮の割合の違いを利用して色を区別しているのです。この 3 種類の錐体の 1 個～複数個の欠損または吸収波長の違いにより色覚異常（色盲、色弱）が生じます。この色盲のために医者になれなかった時代がありました。

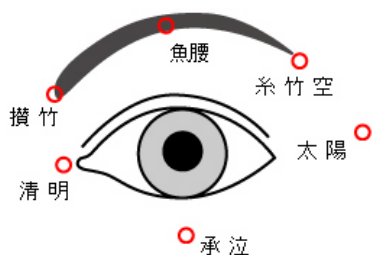
一方の杆体は視物質ロドプシンを持ちます。杆体は1種類しかなく、色（波長）の違いを区別できません。このような視物質は数段階の化学変化を経て、細胞膜のイオンチャネルを開閉させ、その結果、イオン電流が発生して緩やかな電位変化をもたらします。網膜の多くの神経細胞は、脳神経系などで見られる活動電位と呼ばれるスパイク状の電位変化とは異なり、緩やかな電位変化を発生するのです。

昔々の祖先型の脊椎動物は紫外型・青型・緑型・赤型の錐体（および杆体）をもつ4色型色覚であったと考えられます。現生の鳥類は進化の過程で各オプシンを失わず、現在でも4色型色覚をもっています。一方、哺乳類では、初期に緑型オプシンと青型オプシンを失い、現生のものでは2色型色覚が多く、ヒトをはじめとする霊長類では、紫外型オプシンが青色域に吸収域が変わり、また、赤オプシン遺伝子の重複と変異によって緑オプシンが生じた結果として3色型色覚（赤・緑・青）になっているのです。

水平細胞（horizontal cell）は、視細胞とシナプス結合をする神経細胞です。名前のお通り、網膜に水平に軸索が伸び、広い受容野を持ちます。視細胞から双極細胞への信号伝達経路に対して水平細胞は抑制的に結合しており、視細胞の興奮活動の空間的な差異が双極細胞で強調されるように抑制的に働きます。錐体と水平細胞は選択的なシナプス結合が形成されており、3原色信号を反対色信号に色情報を変換しているのです。）

年が明けて、視界の歪みがかなり減ったころ、利き目である右目の近視が強まり視力がかなり落ちてしまいました。手元はよく見えるのに、メガネをかけても1メートルも離れると壁掛け時計の文字盤も読めない程でした。（近視がひどくなったのは、水晶体の厚さを調節する毛様体の神経が、やはりヘルペスと免疫との戦いで炎症を起こし、毛様体の働きがコントロールできなかつたためでしょう。）そんな中、友人に足揉み療法を教えてもらい取り組み始めました。痛みに耐え冷や汗をかきながら揉み続けると冷え性の足がポカポカ温まりました。棒が触れただけでも痛かった目のツボは治ると信じて懸命に揉みました。揉み始めて一週間後、突然の嘔吐と頭痛と発熱がありました。一晩寝こむと翌朝不思議とスッキリとした気分でした。

（中国医学の鍼灸の目のツボについて少し図を描いて解説しましょう。この7つのツボが目の周辺や眼球の神経と密接なつながりがあるのです。中国医学は素晴らしいですよ。）



1	さん竹	眉毛の一番内側のところ
2	魚腰	眉毛のまんなか
3	糸竹空	眉毛の一番外側
4	清明	目頭と鼻のあいだのくぼみ
5	承泣	瞳の下のくぼみ
6	瞳子りょう	目尻から親指1つ分外側
7	太陽	眉尻と目尻から髪の毛の生え際の間にくぼみ

そして2月、視力矯正するしかないと言われ半ばあきらめていた近視が弱まり、視力が戻ってきました。

現在、僅かな飛蚊症があるものの、見え方はほぼ以前の通りに戻りました。そして何よりも首や手首の痛み、寝付きと寝起きの悪さ、便秘などもともとあった不快な症状が全て解消され、これまでになく身も心も快調です。（首や手首の痛みも、首や手首の脊髄神経にいたヘルペスと免疫の戦いであったのですが、戦いが終われば炎症がとれ、痛みも消えてしまったのです。）

松本医院で治療できてよかった点は、ただステロイドから逃れられたということだけでなく、何故自分が病気になったのか深く考えさせられ自分自身と向き合うことができたことです。(ここでは、彼女が賢いのはこれに気づいたことです。なぜ病気が起こるのか？を彼女は考え始めたのです。なぜという問いかけは病気だけではありません。政治、経済、国際関係、教育、行政、税制など、全てにおいて、なぜと問いかけるべきなのです。

つい最近も、大阪市長の橋下徹が、売春システムは必要であったし、今も必要であるという妄言を恥ずかしげもなく吐きましたが、彼に人間性が全くないということの証明です。50年前以上に売春防止法という法律ができたことを彼は知っているのでしょうか？またどうしてそのような法律ができたのか、彼は理解しているのでしょうか？彼は卑しくも法律家なのです。彼には子供が7人いるらしいですが、その一人の誰かが金のために売春婦になりたい子がいますか？と彼に問いたいのです。誰一人として男の慰み者になりたい子はいないでしょう。仮に男には売春婦が必要だという理由で彼の子供が売春婦になることを認めるでしょうか？絶対にないでしょう。なぜあんな発言をしたのか、私には全く理解ができません。にもかかわらずあんな発言をするというのは、彼の人間性を疑わざるをえません。彼が冷酷なエゴイストであるという証拠だと思わざるをえません。他人の子供でも、男の為に必要であるという理由で、売春婦にならざるをえない女性の悲しみを、橋下市長、あなたは理解できないのか、と問いたいのです。にもかかわらず、なぜあんなバカな売春婦を認めるような発言をしたのかと彼に直接問いたいのです。本当に悲しい発言です。女性の心を逆なでするようなことを堂々と言い続ける悲しい人間性を持った市長を選んだのは誰でしょうか？大阪市民です。悲しいことです。)

原因不明の病気は無い、と松本先生がおっしゃるように、私には原田病を発症する理由がありました。病気になる前の数年間、私は仕事で体を酷使して来ましたが、それ以上に強いストレスを感じて生活していました。好きで始めた仕事にも関わらず楽しむこと以上に自分を追い込み、プレッシャーを感じ、体のSOSをことごとく無視して知らず知らずのうちに免疫を落としてきました。顔に現れたアレルギー反応もそのサインでした。しかしこの時も肌がいいと信じて免疫を落とすとは知らずにプラセンタを飲み続けたり、皮フ科で処方された免疫抑制剤を半年以上塗り続けたり。期待とはうらはらに皮膚はどんどん黒ずみ、お客様相手の仕事だったので、黒ずんだ顔で接客をこなすことが更にストレスとなり、ストレスの負のスパイラルに陥ってしまいました。肉体的な疲労も限界に達し、8月ついに仕事をやめることにしました。(彼女はどのようにしてブドウ膜炎になったかを論理的に筋道を立て、完璧に説明をしてくれています。私の出る幕はありません。人間の心が免疫を抑えている間にヘルペスウイルスをどれだけ増やしたかを彼女は解説してくれています。彼女のこの手記を医学大辞典のブドウ膜炎の項に載せるべきです。)

9月松本医院で皮膚症状の漢方治療を開始し12月の発症。まさにストレスが去り、漢方のおかげもあって免疫があがりヘルペスとの戦いが始まったのだと今になって理解出来ます。(そのとおりです。今までの免疫を抑える薬を全てやめ、逆に免疫を上げる唯一の薬である漢方薬を飲むと、ヘルペスウイルスをやっつける免疫の働きが戻ってくるのです。愚かな患者であれば、漢方を飲んだためにブドウ膜炎を起こしたと冤罪を吹っかけてくる人までいます。私のホームページは、はじめから終わりまで病気は医者と免疫を抑える薬と自分自身が作ったものである道理を書きつづっています。

私は「病気は自分の免疫が高まったために敵と戦っているのだ」という、免疫の真実をしつこく語り続けています。にもかかわらず、あらゆるマスコミを利用して、医者たちは、難病は全て原因がない恐ろしいものだと言いまくっています。この世に恐ろしい病気は何もないのです。原因の分からない

い病気も何一つとしてないのです。にもかかわらず製薬メーカーから金をもらい続けている医者たちは嘘八百を恥ずかしげもなく言い続けています。なんとというおぞましい人たちの集団なのでしょうか？と言ったところで、医薬業界の権威と権力を一手に握っている医学会に何を物申しても通るわけはありません。悲しいことです。それでも私は真実をいつまでも追究し、金より大事な患者の命を守り続けるつもりです。その道理をホームページに語り続けているのです。そのうち私も誰かに殺されてしまうでしょう。ワッハッハ！) 自分の健康を過信してケアを怠りストレスを感じすぎた上にプラセンタや免疫抑制剤で免疫を落とすと言う追い打ちを懸けての発症でした。その時々には目の前の症状しか見えていませんでしたが、振り返ると全ての出来事はつながっていて、結果としてきちんと現われる、私の体は完璧な仕事をしてきていたのだな、と納得出来ます。(女性ホルモンの塊であるプラセンタは免疫を上げるとテレビで毎日宣伝され続けています。嘘八百です。なぜプラセンタが免疫を上げるのかについては一言もふれられていません。プラセンタはまさに免疫を抑えるために母親と胎児が作り上げたものです。なぜならば、胎児はお父さんの遺伝子が半分入っているので、母親にとっては半分人間という臓器全体を移植したのと同然なのです。この移植臓器である胎児を拒絶させないためにプラセンタを作り、プラセンタの中に胎児を閉じ込めたのです。まさに母親の免疫から遠ざけ、退治を拒絶させないために生まれたのがプラセンタなのです。しかも市販されているプラセンタは全て人間以外の動物のプラセンタなのです。この異物を塗り薬や飲み薬のみならず注射まで何十回もされてくる患者もいます。そしてヘルペスウイルスいっぱいの中で受診される患者さんが多くなりました。ところが医学会は誰もこのプラセンタのインチキを指摘しません。本当に悲しいです。金の前には人間がいかに無力であるかをまたまた証明しているのがプラセンタなのです。悲しい、悲しい！)

原田病を発症する前に運良く松本医院の存在を知っていたことで私は本当に救われました。

もしも大学病院で治療していたら、一時的に症状がよくなったとしても根本的な解決がなされないのとおそらく再発を繰り返し、ステロイド治療による後遺症でさらなるストレスを感じ、心を病んでしまったかもしれません。自分の心のあり方を見つめることができ、何故病気になったのかを知ることが出来た今、今後、病気にならない為にも免疫を下げない生き方を学ぶことが出来ました。(本当に素晴らしい言葉です。彼女はブドウ膜炎を通じて医学の全ての真実を知るようになりました。なんと聡明な女性でしょうか!!!)

松本医院での治療において大切な事は、自分の免疫の力を信じること。そしてそれは、私たちの免疫の力を信じてくれる松本先生を 100%信じるということだと思います。病気に不安はつきものです。症状のなかなか良くならない時は何かのせいにしたくなります。私も途中何度も試されていると思うことがありました。加えて松本先生の口はかなり悪いです。勉強してこないと容赦なく怒られます。(私は無知は罪だと考えております。私が怒る唯一の原因は勉強しないことです。勉強こそ真実に至る唯一の道であるにもかかわらず、愚かな大衆は娯楽に興じてほとんど賢くなる努力をしないのです。日本の大学生の大多数は、世界で一番不勉強な学生であることが分かっています。生まれつき悪い脳の遺伝子を持っている人間こそ、賢い脳の遺伝子を持っている人間の数倍努力せねばならないのに、逆の現象が起こっているのが日本の現実です。頭の良い人間ほど勉強し続け、難関の医学部に入学し医者になった後、頭の悪い一般大衆をだまし続けているのが医薬業界なのです。頭の良すぎる医者にだまされないために、もっと皆さん勉強しましょう！医者に対して分からないことがあれば、どんどん聞きましょう！なぜあなた達は治りもしないのにステロイドを使い続けるのか？なぜ病気を治せない

のにお金を取り続けるのか？免疫でしか病気を治せないのに、なぜ免疫を抑えるのか、医者に堂々と質問してください！なぜそんな質問にも答えられないのに医者を続けているのか詰問してください！このような、「なぜ」の疑問を持ち続ける限りは少しずつ、今頭が悪い人でも賢くなっていくのです。アホであるのは勉強しないからです。アホでも勉強すれば賢くなれるのです。私がそうですから！)

不安になってくだらない質問をして逆鱗に触れることもあります。世の中あらゆる情報に溢れすぎていて、何が真実かを見抜く力の無い人が多いのは事実です。私もそうでした。また病人ともすれば前向きな判断がしにくかったり、今まで見聞きしたことと正反対の事を教えてくれる松本先生をのっけから信用出来る人は少ないかもしれません。でも病気になったのは自分自身なのだから、人任せにせず先生と出会ったチャンスを生かして先生の理論を理解すれば、何が真実か必ず理解できると思います。(すごい文章ですね。100%正しい論理が展開されています。私はいつも言っています。なぜ人は人に嘘をつくのか、その理由を知っていますか？と。金のためでしょう。しかし私は目的的に金を儲けるために医療を実践しているではありません。資本主義である以上は確かに金が全てです。しかし私は違います。金は病気を治していただきます。病気が治らなければ、私は払ったお金を全部お返ししましょう。しかし治ったときには、払った金の2倍をもらう契約書を用意していますから、実印を持ってきてください、とまで言い切れる男です。なぜならば自分の免疫で治せない病気は、この文明社会には何一つとしてないからです。皆さんも他の医者に診察してもらったときに問いかけなさい。病気が治らなかったらお金を返してくれますか？と。ついでにヤブ医者を喜ばせるために、治ったときには2倍払いますからね、と付け加えてください。ワッハッハ！)

また保険が効かないので医療費はかかります。でも、長い目で見ると、ここで治療を受けることで病気になるならないのメカニズムの真実を知り、これからの人生へタな医療のお世話にならない事を思えば決して高くないと思います。(抗ヘルペス剤を、医学会がブドウ膜炎はもとより、あらゆるヘルペス性神経炎に対して保険を使えることを許してくれないのです。現代の文明の最大の病気の原因はヘルペスであるにもかかわらず、医学会はヘルペス性神経炎が治るまで、継続して抗ヘルペス剤を使わせてくれないのです。なぜだかお分かりですか？答えを言いましょう。誰がヘルペスを増やしたかということになるからです。それは製薬メーカーが作る薬が全て免疫を抑制し、一時的に症状を取るだけで、その間にヘルペスが人体のあらゆる神経に増殖し続けさせていることが分かってしまうからです。つまりヘルペスを増やしたのは医薬業界そのものであるということが分かってしまうからです。その責任は誰が取るべきでしょうか？製薬メーカーであり、かつその薬を出した医者たちであるからこそ、最後に残った文明の病気は医者が増やした頭痛薬、解熱薬、ステロイドであるということ認めざるをえないからこそ、ヘルペスが原因であるにもかかわらず、世界中の医学会は100年も150年もの間認めようとしません。悲しいことですね～！悲しいですね～！)

私が前向きなことを言えるのは、症状がよくなり完治へ向かっているからかもしれません。でも何かを信じられない気持ちや疑いの心は決してプラスには作用しないと私は学びました。心の異物は自分の力で取り除き、感謝の気持ちを育てれば必ず良い方向に向かうと思います。このような疑念を無知な患者の心から去らせる方法はただひとつだけあります。国民皆保険は病気を治さなければ使えないという法律を決めることです。こんな当然なことが医療において行われていないのは非常識そのものです。今の医療は不良品を販売しておいてお金を取るのと何ら変わりはないのです。その不良品た

るや、病気が増えることなのです。無知なる愚かな一般大衆の皆さん、これに気づいてください！病院は病気を治すためにあるのです。医者が病気を作ってお金を儲ける場所ではないのです。ましてや国民皆保険は困っている人の病気を治すためにお互いに相互扶助しているシステムなのです。にもかかわらず、医者が病気を作って金を儲けているシステムとなってしまいました。このシステムを正常に戻すにはどうすればよいのでしょうか？私はホームページを作り、日々の診察で最大の誠意を持って真実の医療を説き、実践し、あらゆる病気を患者に治させています。今後も死ぬまで続けるつもりです。皆さんもあらゆる手段を用いて真実の医療を伝えてください。ブログでも Facebook でも Twitter でもいいですから、自分たちの命を守るために真実を一般大衆に伝えてください。そのためにも私のホームページを勉強し続けてください。)

私の人生を好転させてくれた松本先生への感謝と、家族をはじめ支えてくれた人達への感謝、そして一人でも多くの患者さんが医原病から開放され免疫の真実を知り、医学会と医療保険制度のあり方が改善されることを願い、私の手記とさせていただきます。最後まで読んでいただきありがとうございます。(久しぶりの、というよりもさらに気高く、さらに賢明な手記を本当にありがとうございます。あまりにも手記が素晴らしかったので、思わずコメントがずいぶん長くなってしまいました。本当にありがとうございます！患者の彼女に心から感謝します。)

2013/05/16